

平成 24 年度

順天堂大学大学院スポーツ健康科学研究科 修士論文

女子野球の歴史的考察と現状に関する課題研究

スポーツ社会科学領域スポーツ社会学分野

館 慎吾

論文指導教員 北村 薫 教授

合格年月日 平成 25 年 2 月 25 日

論文審査員 主査 野川春夫

副査 北村 薫

副査 小笠原悦子

目次

第1章 緒言	1
第1節 問題提起	1
第2節 研究の目的	3
第3節 研究方法	3
第2章 明治・大正期の野球	5
第1節 欧米スポーツの伝来	5
第2節 野球の伝来	6
第3節 野球の普及	7
第3章 女性スポーツと女子野球	10
第1節 女性のスポーツ参加	10
第2節 女子野球の萌芽	13
第3節 女子野球の消滅	16
第4節 まとめ	18
第4章 女子野球の黎明期	19
第1節 女子野球の復活	19
第2節 女子プロ野球活況期	20
第5章 女子野球の転換期	24
第1節 社会人野球への移行	24
第2節 女子野球の終焉	25
第3節 まとめ	26
第6章 近年の女子野球	27
第1節 再び女子野球の復活	27
第2節 女子プロ野球リーグの創設	28
第3節 女子野球の現状	30
第7章 ベンチマークとしての女子サッカー	35
第8章 結論	38
第1節 歴史的背景と現状との比較	38

第2節 問題点と解決策	38
第3節 今後の女子野球の普及についての示唆	39
第4節 今後の課題	41
引用文献	43
英文要約	46

第1章 緒言

第1節 問題提起

(1) 女子スポーツの中での野球の位置

日本における女性のスポーツへの参加は、1970年以降スポーツが大衆化したことにより、女性が参加できる種目も大幅に増加し、急激に進んできた³⁴⁾。各種の格闘技、ラグビー、アイスホッケーなどの従来は男性のスポーツと思われてきたコンタクトスポーツにも進出してきている。また、女子サッカーのなでしこジャパンが2011年に開催されたドイツ女子W杯で優勝し、さらに2012年に開催されたロンドンオリンピックでも銀メダルを獲得したことで、女子サッカーの人気は拡大している。

日本における女子野球の現状は、競技人口の面から見ると、2012年8月現在、日本女子野球連盟に所属している全国高等学校女子硬式野球連盟、大学・一般クラブチーム、全日本女子軟式野球連盟、全国大学女子野球連盟、日本女子プロ野球機構の合計で約160チーム、約3,000人という状況である⁵³⁾。一方、女子サッカーの競技人口は、2011年度の登録者数は、女子チームに登録している選手だけで26,237人、チーム数は女子チームのみで1,267チームとなっている⁵¹⁾。女子野球は、競技人口も少なく、認知度も低いと言える。

(2) 女子野球の歴史

歴史を振り返ると、野球は、明治時代に日本に伝来し、男子学生が中心となってプレーをしてきたが、1902年には、京都第一高等小学校で女子用に改良された野球が行われている¹⁵⁾。1922年には、福岡県直方高等女学校に野球部が創設され、少年野球大会で優勝したという記録も残されている³⁷⁾。さらに1924年に開催された「第1回女子オリンピック大会」の種目として野球も参加している²⁷⁾。また、戦後間もない1950年には、女子のプロ野球リーグが設立され、1952年にノンプロ組織に移行したが、1971年に消滅するまで一時的に人気を獲得した時期もあった。このように全く女性が野球をプレーしていなかったというわけではなく、一時的に人気を獲得し、衰退、消滅していった歴史が繰り返されていると言える。しかし、そのような歴史の中でも女子野球は、長い間人気を獲得することはなく、女性スポーツとして定着するまでには至らなかった。

(3) 近年の女子野球の状況

2001年5月28日に、長い歴史を持つ東京六大学野球連盟史上初めて女性投手同士が

先発し投げ合いを演じた。明治大学の小林千紘選手と東京大学の竹本恵選手である。その後、2005年には、片岡安祐美が社会人クラブチームの茨城ゴールデンゴールズに入団した。さらに2009年には、吉田えりが関西独立リーグに入団し、男性と同一チームでプレーする初めての女子プロ野球選手となっている。そして、2010年4月からは、関西で女子プロ野球リーグが開催されるようになった。

(4) 女子野球を取り巻く環境

日本で女性が野球に参加する環境に目を向けてみると、小学生が参加する学童野球チームでは、女子の参加が認められているものの、女子による単独チームの数は非常に少ない。中学校に入ると、学校でのクラブ活動での女子野球チームはほとんどなく、野球をプレーしたい女子は男子に混じって野球部に入るか、クラブチームへ入ってプレーすることになる。高校に入っても同じような状況は続いている。さらに、日本高等学校野球連盟は、女子の公式戦出場を認めていない。つまり、高校野球児の最大の目標である甲子園大会には、女子は出場することができないのである。また、中学、高校になっていくと体型もかわり、体力的にも差が出てきてしまうために男子の中に混じってプレーすることは困難になってくる。このような状況の中で、野球をプレーしたい多く女子が仕方なく他のスポーツへ転向してしまうケースが多く、女性が野球に継続的に参加していくのは厳しい環境にあると言える。

(5) アメリカでの女子野球の状況

野球発祥の地であり、野球を国技とするアメリカにおける女子野球の状況はどのようになっているのだろうか。第二次世界大戦中に多くの男性選手が兵士として戦争へ駆り出され、メジャーリーグの中断が噂される中、その代替措置として女子プロ野球リーグが1943年に始まり、盛り上がりを見せた⁵⁾。1948年には、100万人もの観客を集め、ピークを迎えた。しかし、1950年以降、男性選手の復員によるメジャーリーグの人気回復に伴い、女子プロ野球選手も元の家庭での役割を求められるようになり、次第に観客動員数も減り、リーグも採算がとれなくなると負債が毎年増大し1954年にはリーグを閉幕した。その後、1992年に全米女子野球連盟(AWBF)が創設され、1994年には40年ぶりに女子プロ野球チームのコロラド・シルバールベッツが結成され、1998年にはプロリーグ(Ladies League Baseball)も復活したが長くは続かなかった⁵⁾。現在、北米ではアマチュアリーグのみが存在している状況である。野球発祥の地であるアメリカでも女性が野球をプレーする環境は、厳しい状況と言える。

(6) 問題の所在と研究動機

女子野球を女性のスポーツとして定着させる為には、女性が野球をプレーする環境を整えることが最も重要である。筆者は、ボランティアで学童の女子野球チームの指導をしている。その中で、女子が野球を継続してプレーする環境が整っていないことを実感している。このような現在の女子野球を取り巻く環境を少しでも改善し、女子の野球を少しでも普及させたいと考えたのが本研究の動機である。

第2節 研究の目的

近年、女子プロ野球リーグの開催に代表されるように女子野球への関心は高まってきていると言える。しかし、男性のスポーツとして男性中心に発展してきた野球は、女性の競技人口は少しずつ増えつつあるものの、女性のスポーツとして社会に定着・普及しているとは言い難い。同じベースボール型スポーツとしてソフトボールが女性のスポーツとして定着し、女子サッカーも人気を獲得している中で、激しい身体的コンタクトを伴わない野球がなぜ女性のスポーツとして定着していかなかったのであろうか。そこで、本研究では、ふたつの課題を設定して研究を進めていくこととする。

研究課題①：日本における女子野球の歴史を考察することで、女子野球が定着してこなかった理由を時代的背景から明らかにする。

研究課題②：課題①で明らかになった理由を女子野球の歴史に照らし合わせることで、現在の問題点と今後の女子野球普及のための指針を明らかにする。

現在は、女子のプロ野球リーグが開催されているように野球をプレーする女性にとって、大きな目標ができた。目指す頂点ができたことで女性が野球をプレーする環境は、今後、大きく変化していくことが考えられる。しかしながら、現状では、女子野球を取り巻く環境は非常に厳しいものがある。そこで、本研究が女子野球普及のための資料となると考える。

本研究を行うにあたり、女子野球に関する研究、文献は非常に少ないことから、女子野球に関する歴史的事実の検証、知見には限界があることが予想される。そのような中で、次節では、この研究目的を達成するために必要な研究方法について述べる。

第3節 研究方法

女子野球の歴史に関する研究としては、庄司が大正期のキツンボールに焦点を当て

てキツンボールが高等女学校において受容され、消滅していった背景を研究している²⁶⁾。また、花谷らによる女子野球に関する歴史的考察の研究がある⁷⁾。この研究は、アメリカの女子ベースボールと日本の女子野球を歴史的に検証し、日米両国の女子野球を比較することで今後の女子野球における一スポーツ文化としての発展の方向性を探ることを目的としており、女子野球は、一スポーツとして確立はできるものの、プロ化は困難と結論づけている。

女子野球の歴史に関する研究として、庄司の研究は、大正期の女子野球にフォーカスしたものであり、花谷らの研究は、2000年以前と古く、その後の女子野球の環境は大きく変化している。女性が野球に参加し始めた明治期から今日までの女子野球の歴史を検証し、その経過を時代的背景から検証した研究は見当たらない。

本研究では、庄司、花谷らの研究を参考に、女子野球に関する文献、新聞等の資料や歴史的史料から女子野球を歴史的に検証する。さらに、女子野球を取り巻く現状については、新聞、インターネット等の情報を収集して研究を進めていくこととする。

第2章 明治・大正期の野球

第1節 欧米スポーツの伝来

鎖国を廃した明治維新後の日本は、300年近く続いた封建制度に終止符を打って、西洋に追いつこうと近代化に努め、西洋文明の摂取に取り組んだ²²⁾。そのような中で西洋のスポーツが急激に日本へ輸入されるようになった。それでは、どのようなスポーツが日本へ摂取してきたのであろうか。木下透明によると、欧米スポーツの摂取に関しては、次のようにいくつかのパターンが挙げられる¹²⁾。

(1) 軍事に伴うスポーツの摂取

洋式訓練の初歩的訓練としての体操や軍事上重要である射撃、騎兵創設に伴い従来の日本式馬術から洋式馬術への変換の必要性からの馬術や片手軍刀術であるサーベルの指導からの剣術などは、軍事上の必要から導入されたスポーツである。

(2) 外国人居留地からのスポーツの摂取

開国によって出現した横浜や神戸の外国人居留地における居留外人の生活様式は、日本人の好奇心の対象となった。乗馬から発した好奇心はたちまち競馬を日本人のもととして摂取し、玉突きは、軽度の運動を伴う社交的室内娯楽として広まり、さらには、鹿鳴館に代表されるようにダンスも行われていた。また、外人居留地では早くからテニス、ゴルフ、スケート、ヨット、水球等も行われており、文明開化の時流のもとで外人居留地からさまざまなスポーツが摂取された。

(3) 留学帰国者によるスポーツの摂取

留学帰国者が現地で摂取して持ち帰ったスポーツの代表が野球である。野球はアメリカ人教師ホーレス・ウィルソンによって広められたと言われている²⁴⁾が、アメリカから帰国した鉄道技師の平岡熙によって本場の野球が持ち込まれたことを見逃すことはできない。平岡は、ボストンで鉄道技師としての教育を受けるかわら、野球をプレーし、帰国に際してボールやバットを持ち帰り、帰国後の職場である新橋鉄道局に「新橋アスレチック倶楽部」という野球チームを結成し、当時の日本の野球界をリードした。また、卓球は、体育研究のために欧州留学した東京高師教授坪井玄道が1902年に日本に持ち帰ってから急速に普及したスポーツである。

(4) 学校教育に伴うスポーツの摂取

欧米式の学校教育の導入が欧米スポーツの導入をも必然的にもたらした。1872年の「学制」発布以降に見られる組織的な学校教育の展開と共に、学校は欧米スポーツ摂取

の中心的機能を担うこととなる。当時の学校体育は、軍隊的感覚でのスポーツ導入が中心であったが、学校スポーツの普及も並行して始まった。学校スポーツの中心的な役割を果たしたのが体操伝習所であり、体操伝習所の教員であった坪井玄道らが1885年に出版した「戸外遊戯法」は、学校における欧米スポーツの導入を企図したものである。これが学校におけるスポーツ活動展開の契機となり、これ以降、小学校向けの遊戯指導書が次々と出版された。また、大学への欧米スポーツの導入は、個人的趣味以上にスポーツによる教育の必要性を認識した一外国人教師ストレンジによって始まった。ストレンジは、イギリス人で英語教師であったが、課外スポーツ指導に情熱を示し、自ら学生の先頭に立ってグラウンドを駆け回り、ボートを漕ぎながら、スポーツの神髄を学生に教えると同時に、大学における課外スポーツの組織化・恒常化に大きく貢献した。

上記以外のパターンとしては、外国人によるスポーツの紹介が考えられる。ウィルソンが伝えた野球のほかに、伝習所のアメリカ人講師リーランドが紹介したとされるテニス、英語教師として赴任していたE. B. クラークが慶応義塾の塾生に紹介したラグビー、オーストリア軍参謀少佐のレルヒが日本陸軍の軍事視察を目的として来日し、その際に陸軍に紹介したスキーなどが挙げられる。

第2節 野球の伝来

日本に野球が伝来したのは、アメリカ人教師、ホーレス・ウィルソンが学生たちに教えた明治5年が最初だと言われている²⁴⁾。しかし、1973年にベースボール・マガジン社から発行された君島一郎の「日本野球創世記」の中で、君島は、近代野球を少なくとも二組のチームに分かれて野球をすることで初めて野球の名を使えるという解釈をしている⁴⁴⁾。その視点から考察すると野球の伝来については、君島の論文の中で「好救世」と名乗る人物が明治6年に開成学校において二組でベースボールを行ったと記述していることから、明治6年開成校説が有力である⁴⁴⁾。あるいは、別な説として、「クラーク博士とその弟子たち」という書籍の中で、明治6年頃、大蔵省の雇であった米人ウィリアム氏の甥ベーツ氏が開拓使仮学校の英語教師に雇われており、生徒たちと二つのチームを組織させ、毎日放課後に校庭で対戦させたと記述されていることから、明治6年開拓使仮学校説も存在する⁴⁴⁾。

さらには、野球の伝来については、熊本洋学校の外国人教師や横浜などの外国人居留地のアメリカ人が伝えたという説もあり、明治5年の開成学校説、明治6年の開拓使仮

学校説も含めて、はっきりとした根拠がなく定かではない。

いずれにしても、明治維新後、西洋スポーツが急激に日本に流れ込む中で、日本人は、ピッチャーとバッターの一対一の闘いのなかに、相撲や武道に相通じる心理的要素を発見し、身技一体、心身両面の調和と強靭さを要求される点で、野球は、まさに武道的であると共に日本人向きであり²²⁾、日本への伝来後、日本中へと広まっていくのである。

第3節 野球の普及

(1) 一高時代

日本への野球伝来後、野球は学生スポーツの中で王座の地位を占めるようになるが、その主導的役割を果たしたのが、旧制一高野球部であった²⁴⁾。1886年、第一高等中学校（のち第一高等学校、一高）の設立と同時に野球部が創設され、猛練習にて圧倒的な強さを誇り、「一高時代」と呼ばれる黄金時代を築くようになった。「一高時代」と呼ばれていた期間の公式戦の成績は、64勝11敗で、とくに1900年以降は、32勝1敗という圧倒的な強さを誇っていた。当時、東京には、アメリカから野球を覚えて帰国した鉄道技師、平岡熙によって設立された「新橋アステチック倶楽部」をはじめ、駒場農学校、明治学院、青山英和学校、慶応義塾などでも野球部が結成され、校内での試合や対応戦を始めていた。「新橋アステチック倶楽部」だけは、学校を基盤としたものではなく、職場クラブであったが、「一高時代」以前は、野球界の盟主としての地位を確立していた。

正岡子規が大学予備門（翌年、一高に改編）に入学したのは1884年のことであり、子規は、一高時代に野球に熱中した。正岡子規の四年後輩の中馬庚は1894年に、ベースボールをフィールド（野原）で行われるボールゲームの意味で「野球」という名称で訳している¹²⁾。しかし、それより前に子規がベースボールを「球戯」と訳していることは注目に値する⁴⁵⁾。

「一高時代」の華やかな戦歴の中でも特筆すべきは、横浜在住のマメリカ人チーム「横浜アマチュアクラブ」との国際試合である²⁴⁾。1896年5月23日に、一高の外人教師の斡旋で実現した「横浜アマチュアクラブ」との対戦は横浜外人居留地運動場で行われ29対4で大勝した。アメリカチームは、野球を娯楽として楽しみ、時々プレーしていた程度の商人、貿易業者、宣教師などのグループであったが、一高勝利のニュースは全国を駆け巡り、野球人気が全国に広がった。同年6月5日、雪辱戦として「横浜アマチ

ユアクラブ」から試合を申し込まれた一高は、32 対 9 という大差で連勝した。これに対してアメリカチームは、横浜港に停泊中であったアメリカ海軍の水平たちを加えてチームを強化し、第 3 戦に臨んだが 22 対 6 で一高が圧勝した。第 4 戦は、メンバーを強化したアメリカチームに 12 対 14 と惜敗するが、翌年に再開された第 5 戦から 1904 年の第 13 戦まで対戦成績は 11 勝 2 敗であり、その強さを見せつけた。

(2) 早慶時代

20 世紀に入ると、1901 年には、早稲田大学に野球部が誕生し、1903 年に慶応大学との間で早慶戦が始まった。1904 年 6 月には、一高が早稲田大学、慶応大学に連敗し、「一高時代」に終止符が打たれ、早慶両校を頂点とする時代へと変わっていった。

1905 年 4 月に 早稲田大学が野球部創始者の安部磯雄を団長とし、日本初のアメリカ遠征を行い、スタンフォード大学をはじめアメリカ西海岸の大学や中学、セミプロ、軍隊などのチームと対戦し、7 勝 19 敗という成績を残した。この時、早稲田大学野球部は、アメリカからさまざまな最新野球技術を持ち帰り、これら最新の情報を雑誌や新聞を通して全国へと広めていった。1906 年には 早慶戦が両校応援団の衝突の危険から中止となり、以後約 20 年間にわたり中断した。1907 年には、慶応大学がハワイ・セントルイス球団を招いて試合を開催、翌年には早稲田大学の招待でワシントン大学野球チームが来日している。

(3) 中学野球の普及

このような大学野球の盛り上がりは、高校（旧制中学）にも広がり、全国で中学野球の地方大会が開催されるようになった⁴⁵⁾。そのような中で各地方大会の集大成の大会として 1915 年 8 月に大阪の豊中球場において第 1 回全国中等学校優勝野球大会が参加 10 校、出場選手 150 人で開催され、京都二中が優勝している。

出場校の増加に伴い、第 3 回大会からはグラウンドが二面使える兵庫の鳴尾球場で開かれた。1923 年の大会で観客がグラウンドになだれ込み試合開始が困難となり大混乱を巻き起こしたことを受けて 1924 年の大会からは新設の甲子園球場で行われることになった。また夏の大会の盛況をうけ、同年春からは名古屋の八事球場で全国選抜中等学校野球選手権大会が参加 8 校のもとで開催され、翌年からは甲子園球場で行われるようになった。

1925 年には、甲子園大会の加熱ぶりを受け、これまでの慶応、早大、明大、法政、立大の 5 校リーグに新しく東京帝大が加入して東京六大学リーグを結成し、早慶戦も約

20年ぶりに復活した。1926年には、それまで大学のグラウンドしかなかった関東に神宮球場が完成し、関西の甲子園球場と並び立つこととなった。

(4) 野球害毒論

このように、明治維新後に野球が日本に伝来してから大正時代までの間に、野球は瞬く間に全国へと広がり学生スポーツのなかでも確固たる地位を築くようになった。しかし、その間に一時、野球が否定された時代が存在した。「東京朝日新聞」による野球害毒キャンペーンである。

これは、1911年8月20日から「野球界の諸問題」、つづいて8月29日からは「野球と其害毒」と題して、合計26回にわたって「東京朝日新聞」が連載したものである。各界著名人や教育者が、野球の「害毒」を次々とならべた。その中で、当時の静岡中学の校長は、野球の「害毒」として、①時間の浪費、②学生に「余計な費用」がかかり、「虚飾に流れる」こと、③野球の特徴である「共同一致の精神」が負の方向へ発揮され、風紀や「校紀肅正の上にも弊を及ぼす」こと、④「学業不成績」となることをあげ、野球に対する規制は強化されていった²⁴⁾。

(5) 野球の奨励

野球に対する厳しい状況も第一次世界大戦後、とくに1920年代に入って大きく転換した²⁴⁾。これは、皇室が、1921年以降、スポーツの積極的な支持者であるというメッセージを発信しはじめたことに起因する²³⁾。皇室のスポーツ奨励は、大正天皇の病状悪化、大正天皇の第一皇子である皇太子裕仁（のちの昭和天皇）の襲撃事件が発生するという状況の中、深刻な危機感を抱いた皇室が天皇の権威を再構築するためと天皇の代替わりを視野に入れながら国民との新たな関係創出のために行った皇室解放政策の一端を担うものであった²³⁾。

大正天皇の第四皇子澄宮（のちの三笠宮崇仁）は、学習院初等科に入る頃より熱狂的な野球ファンとなっており、皇室や宮内庁職員もそれを支持した。裕仁の学習院初等科時代の院長が、徹底的な野球否定論者である乃木希典大将であったことをすれば劇的な変化であり、野球害毒キャンペーンからの野球に対する状況の変化を物語っている。

第3章 女性スポーツと女子野球

第1節 女性のスポーツ参加

(1) オリンピックにおける女性選手

オリンピック競技大会に女子の種目が正式に採用されたのは、1900年の第2回パリ大会からである。当時の女子選手の割合は、わずか1.6%にすぎなかった。その後、女子選手の割合は増え続け、2004年のアテネ大会では、女子選手の割合が40%を超えるようになった²⁹⁾。2012年のロンドン大会では、26競技302種目が実施されたが、ボクシングに女子が加わり、全競技で女子種目が実施される初の大会となった。また、これまで女性の出場を禁止していたサウジアラビア、ブルネイ、カタールの三カ国は、ロンドン大会に女性選手を派遣し、すべての参加国で女性の出場が実現した。ブルネイやカタールを含め約4割の国または地域で女性が旗手を務め、女性の躍進を印象付けた。

(2) 日本における女性のスポーツ参加

日本において女性が近代スポーツの場に登場するのは、1890年頃からであり¹³⁾、その頃、女性がスポーツに参加する機会は、学校の課外活動に限られていた。1895年に高等女学校規程が定められ、その後に女子中等教育としての高等女学校が誕生した。高等女学校とは、「良妻賢母思想を普及するため」に作られた女子教育機関であり¹⁴⁾、明治以降、近代国家建設をめざした日本では、それを支える国民の養成が重要課題となった。そして、良妻賢母思想のもと、女性には「子どもを育て教育する母親の役割」と「家事を責任持って遂行する妻の役割」の必要が生じ、そのために女子教育の充実が必要になったのである¹⁴⁾。

この頃の文部省令では、「競走遊戯」は、女性らしさを損なうとしたため、女性には適当でないとされていたが、1903年に高等女学校教授要目が改正され、はじめて具体的なスポーツとして、クロッカーやテニス（ローンテニス）が登場する。現在でいう指導要領にスポーツが含まれたことによって、高等女学校におけるスポーツ活動は次第に盛んになっていった¹³⁾。

さらに、富国強兵の観点から、立派な母となり、立派な男子を産み育てる母性の健康・体力づくりが必要になったことから、高等女学校では、体力・気力を充実させるために体育の振興は教育の重要な柱となり、スポーツがより奨励されていった¹⁴⁾。

そのような機運の中で、高等女学校におけるスポーツ活動は盛んになり、陸上競技、水泳、テニス、バレーボール、野球、卓球、クリケット、バスケットボール、バドミン

トン、ゴルフ、スキー、乗馬、ダンス、ビリヤードなどが行われるようになった²⁾。このように女性のスポーツの普及は高等女学校を中心に進められていき、妻となり母となる女性たちに、スポーツが重視されるようになった。一方で、初期の体育指導者たちの中には、競技性の高いスポーツに批判的な人々もあり、女子生徒たちが過度にスポーツを楽しむことを危惧する見解も多く見られた¹¹⁾。

(3) 日本における女性スポーツの組織化

日本で女性たちが本格的にスポーツを楽しむようになったのは、大正時代中期以降で、その頃から競技会や組織化が少しずつ進んでいった¹¹⁾。高等女学校においてスポーツが盛んになり、さまざまな競技の校内大会が行われるようになると、時には、高等女学校同士の対抗戦も開催された¹¹⁾。そして、1915年日本オリンピック大会での陸上競技や1923年第6回極東大会のバレーボールのように、女性が男性競技会にオープン参加という形で登場するようになった¹¹⁾。その後、女性のための競技会が行われるようになり、1924年に、第1回日本女子オリンピック大会が開催された。この大会は、陸上競技、水泳、バスケットボール、バレーボール、卓球、野球などの競技を採用した本格的な競技会のはじまりである¹¹⁾。

(4) 日本における女性選手の国際競技会への参加

日本の女性選手の国際競技会への参加は、1923年5月21日～26日に開催された第6回極東選手権競技会における水泳、テニス、バレーボールが最初であったとされている¹¹⁾。日本選手として初めてオリンピック大会に参加したのは、1928年第9回アムステルダム大会に出場した人見絹江選手であった。

日本人女子選手のオリンピックの参加者の人数の推移をみると初めて参加したアムステルダム大会からローマ大会までは20人程度であり、1964年の東京大会を境に少しずつ増加傾向であった。そして1996年のアトランタ大会以降急激に女子選手の人数が増えた(図1参照)。これは、バレーボール、サッカー、ソフトボール等の団体種目で日本の女子チームが参加していたことも原因のひとつであるが、女性のスポーツ参加が増えてきた証でもある。女子選手の増加と共に女子選手のオリンピック大会での活躍が目立つようになり、メダル獲得数も増加し、男子と同じくらいのメダル獲得数になっていく。

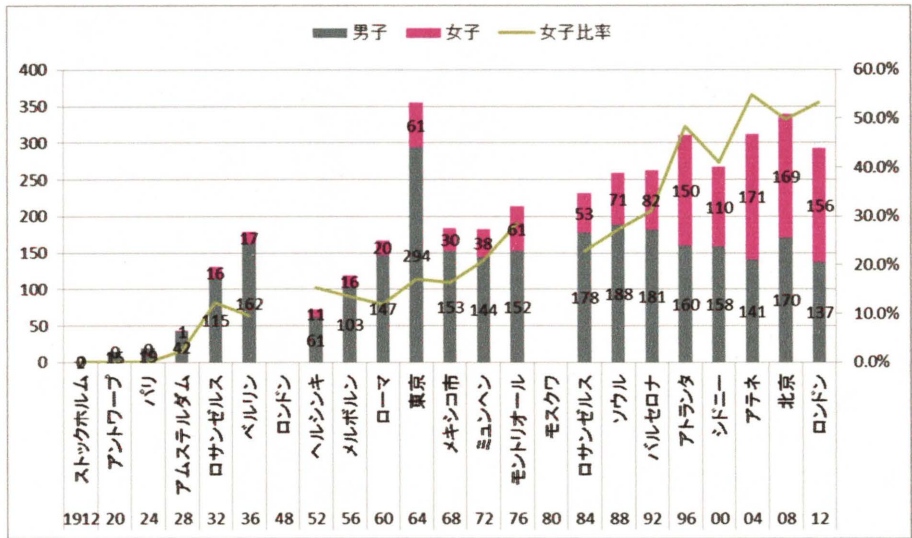


図1. オリンピックの日本人男女選手数（JOC資料より筆者作成）

1928年のアムステルダム大会で唯一の女性選手のでった人見絹枝が800メートル走で銀メダルを獲得し、1936年のベルリン大会では競泳の前畑秀子が初めて金メダルに輝いた。しかし、1988年のソウル大会までは、メダル獲得数も非常に少なく、種目も、競泳かバレーボールに偏っていた。一方、男子のメダル獲得数は、ソウル大会で激減している（図2参照）。前々回モスクワ大会では西側諸国が前回のロサンゼルス大会では東側諸国がボイコットし12年ぶりにアメリカとソビエトの2大国が揃ったことが原因のひとつであるが、この頃より国をあげて強化する他国の選手に比較して強化の面で遅れをとってきたと言える。

女子のメダル数は、1992年のバルセロナ大会より増加傾向にある（図2参照）。これは、日本女子の得意種目である柔道がバルセロナ大会で正式種目となり、2004年のアテネ大会からは、女子のレスリングが正式種目になったことが原因のひとつにあげられる。1992年のバルセロナ大会以降は、男女のメダル獲得数（図2参照）はほぼ同じであるが、金メダルの数に限ってみると2004年のアテネ大会から2012年のロンドン大会まで3大会連続で女子の方が上回っている（図3参照）。

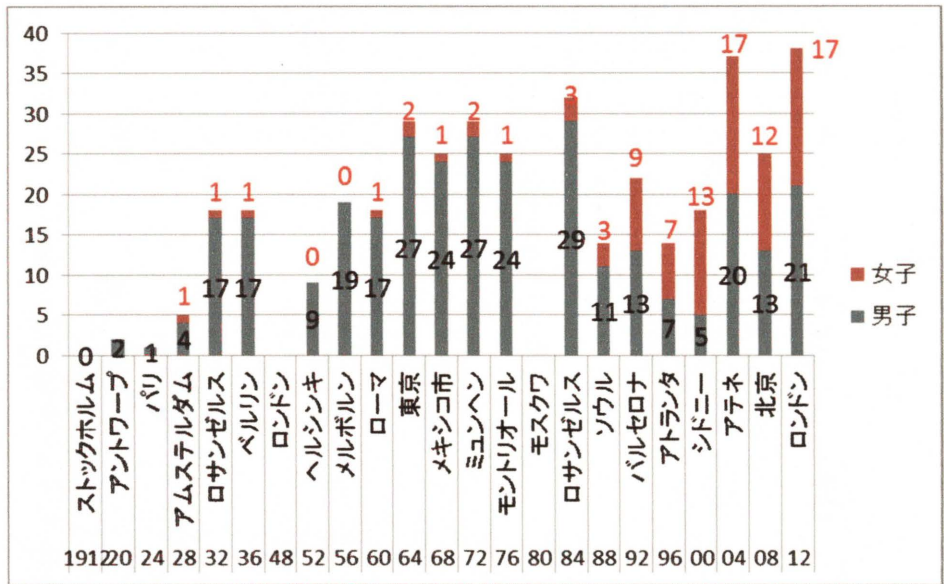


図2. オリンピックの日本人選手男女別メダル獲得数（JOC資料より筆者作成）

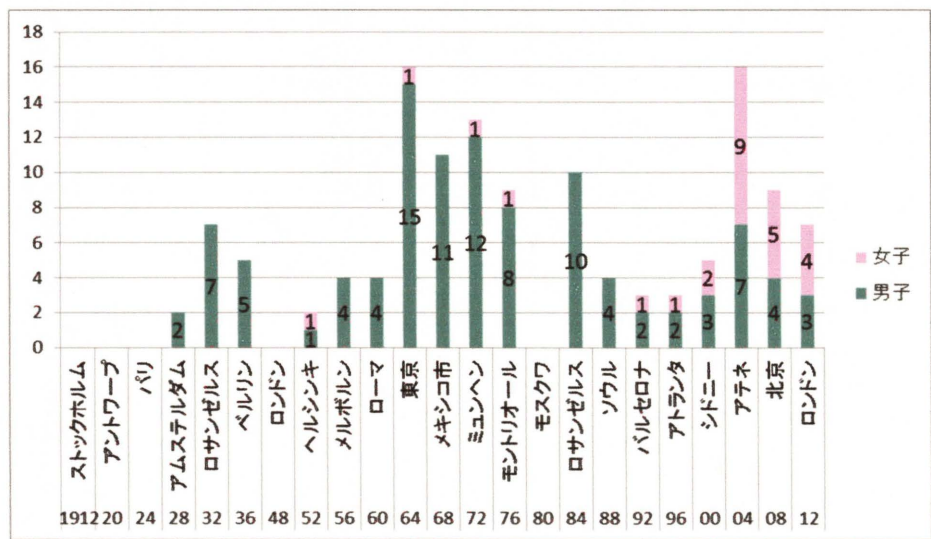


図3. オリンピックの日本人選手男女別金メダル獲得数（JOC資料より筆者作成）

第2節 女子野球の萌芽

日本における女子野球の歴史を振り返ると、明治時代には、1902年に日本女子大学校体育教師であった白井規矩郎が、女子用ベースボールのことを、イギリスで考案したものを改良した競技であり、高等女学校以上の遊戯の中では、女子に適していると思われると論じている²⁵⁾。さらに1903年に京都第一高等小学校において「女子適用ベースボール法」が発行されている。

この中で、この競技は、団体的であること、個人の責任を重んずること、独立心を養うこと、身体全部を使用すること等、児童遊戯として内容・価値共に完全に近いものとしてその教育上の価値を高く評価している¹⁷⁾。守備側は、九人、使用球は、ゴムボールで、投手がホームベース前の四角の中に投げ入れるボールをラケットで打つという形式であるが、競技ルールは今日の野球とほとんど変わらない。ゴムボールを使用し、ラケットで打つことからこれらの競技を野球と呼ぶかは、いささか疑問ではあるが、ルールが今日の野球と変わらないことと女子用とは言え、『ベースボール』と呼んでいたことからこれらの競技も女子野球と定義する。

大正時代に入り、1917年に愛媛県の今治高等女学校に女子の野球部が創部されている³¹⁾。この頃の女子の野球は、インドアベースボールと呼ばれていた。インドアベースボールの起源は、1887年、アメリカ合衆国のシカゴ市において、ジョージ・ハンコック氏によって考案された。冬季における室内遊戯の必要と、四季を通じて室内や戸外の狭い限られた場所で行うことができること、従来の野球と違ってそれほど過激でないことなどから、男女間でできる競技として世界中に広まった¹⁹⁾。

日本においては、北米YMCA同盟体育事業のフランクリン・H・ブラウンが関西中心のYMCA体育事業の指導において、1917年ごろに基督教青年会の体育部員に教えたのが最初とされている²⁰⁾。新愛知新聞の社員であった林正雄がこの遊戯を名古屋に紹介し、普及に努力した。そして、1918年には、新愛知新聞社運動部主催のインドアベースボール大会が2回（6月8日、11月23日）開催されている²⁸⁾。

名古屋高等女学校の校長である越原和が「女子に野球を奨励す」という論文で、国際的生存競争に打ち勝つことができる立派な体力を持つ国民をつくり出すために、男子と同様に女子の体力をも強くせねばならぬと説き、野球を通じた女子体育の必要性を説いた¹⁵⁾。そして、柔道や剣道なども悪くはないが、これらは室内運動なのであまり歓迎できず、戸外運動としてテニスと共に野球を女子の体育として奨励すると共に野球の教育上の効果として、頭脳の働きを緻密にすること、行動を俊敏にすること、体力を養うこと、身体各部の発育を促すこと、正確なる判断力と思考力を養うこと、高尚なる人材を養うこと、共同一致の美風を養うこと、精神統一の力を養うことを挙げており、効果の大きいことを強調した¹⁵⁾。

また、新愛知新聞記者の廣瀬謙三は、名古屋では数校の女学校がインドアベースボールをプレーしており、さらに他の市の小学校でもほとんど採用している⁹⁾と述べている。

このことから、インドアベースボールの流行の一端をうかがい知ることができる。さらに大谷武一がインドアベースボールを「簡易野球」と名付け、簡易で面白くあり、相当教育的であるから、広く普及させたいと述べている¹⁹⁾。

また、林は、インドアベースボールのルールが室内本位で作られ、ボールも屋外では破損しやすく満足なゲームができないとしてキッツンボールを紹介した²⁶⁾。キッツンボールは、1916年頃にアメリカ合衆国のミネアポリスの中央体育院監督であるジョンソン氏の創案によるものである。林は、この競技を老若男女、経験者の有無を問わず人さえ集まればすぐに出来るし、危険もなく、壮快な気分を味わうことが出来る競技である²⁾として、男子ばかりでなく女子の学生にも普及を目指していた。

この競技は、1922年に「キッツンボール競技会」が開催された。翌年には、「第1回東海キッツンボール大会」が開催され、1925年まで計6回開催された。インドアベースボール、キッツンベースボール共にアンダースローであることからソフトボールの起源とする説もあるが、当時の雑誌などで女子用の野球として紹介されていることから、これらの競技も女子野球と定義する。

キッツンボールでの使用球は耐久性に問題があったことから、手軽で安全な軟式野球ボールが日本で開発された。この軟式野球ボールの出現が野球の大衆化を促し、女子にも軟式野球が普及していった²⁷⁾。1923年7月15日に和歌山県で少年野球ルールを適用して、橋本高等女学校、粉河高等女学校、和歌山高等女学校の3校で女学校野球大会が開催された²⁰⁾。さらに1923年12月9日には、大阪において、築港北小学校、岸和田市小学校、市岡高等女学校、泉南高等女学校、和歌山高等女学校、粉河高等女学校の6校で第1回女子軟式野球大会が二千人余りの観衆の中で開催された²¹⁾。また、1924年6月15日に第1回日本女子オリンピック大会が、1925年4月12日には、第2回日本女子オリンピック大会が開催されたが、この大会では、独自の女子野球規則のもとで軟式野球ボールを使用した野球競技が実施されている²⁷⁾（表1参照）。

第1回大会後に発行された「日本女子オリンピック年鑑」においては、女子の野球のことを、大会中一番見劣りした競技であり、バスケットボールやバレーボールと比較しても大いに研究の余地があると記載されている³⁰⁾。このことから、当時の女子野球の競技レベルはかなり低かったことが伺える。また、女子野球は他の競技との比較からも特に体力を必要とするわけではなく、特に激烈であるというわけでもないのが不適当とは考えていないが、女子には不向きな競技ではないか⁸⁾という見方もあった。

表1 明治、大正期の女子野球一覧

呼称	使用ボール	ダイヤモンド	投法	備考
インドアベースボール (簡易野球) (室内野球)	表面を白牛皮で覆った軟らかい球	一辺8.23m 屋外10.67m	アンダースロー	インドアベースボール大会(大正7年) 大正14年「全国高等女学校校長会議」で女子には過激な種目とされる
プレーグラウンドボール	表面を白牛皮で覆った外縫いのプレーグラウンド球	一辺10.67m	アンダースロー	大正15年学校体操教授要目 教材に女子のみ削除
キッツンボール	表面を白牛皮で覆った外縫いのプレーグラウンド球	一辺13.72m	アンダースロー	東海学生キッツンボール大会(大正12年~14年)
軟式野球	軟式野球ボール	一辺21.34m	オーバースロー	大阪第1回女子軟式野球大会(大正12年)
女子野球	軟式野球ボール	一辺21.34m	オーバースロー	日本女子オリンピック大会(大正13年)の種目 女子野球規則作成

(庄司節子「ルールから見た大正期の女子野球普及についての検討」1998等より筆者作成)

第3節 女子野球の消滅

1920年代の女性スポーツ観は、教育者や医者などの識者においては、女性がスポーツをすることには肯定的であった。報知新聞が「女子に過激な運動を奨励して好いか」(1922年5月16日からの寄稿連載)に対する高等女学校の校長の回答には、ベースボールを含めて生理的に許される限り、何でも奨励してよいとあり、女性のスポーツには肯定的であった³⁾。さらに、医者である木下東作は、一家の隆盛が延いては国家の隆盛に結びつき、家庭教育の主たる人は主婦であり、婦人の体育指導者としての資格の必要性を説くと共に、婦人に激しい運動は禁物であるが女子体育指導者の養成が必要という観点からも女子の体育を奨励している¹³⁾。

しかし、一般の人たちの多くは、女性がスポーツに参加することに否定的であった²⁾。これは、当時の女性観が、良妻賢母思想を理想とするもので、男性と対等にスポーツをすることは、上下関係を崩すものであり、また、激しい運動は母体に影響を及ぼすと考えられていたからである。

このようなスポーツに関する女性観が存在する中で、明治後半から大正にかけて高等女学校の生徒と一部の上流階級の女性がスポーツに参加するようになってきたが、1920年代以降に特に強調されているのは、女子の身体を強健にすることが国家にとって重要であるという考え方である⁴⁶⁾。つまり、女性が不健康であれば、強壮な兵隊になる子どもを生き育てることができないのだから、女性の健康が国家の威力となると考えられるようになり、男子と同様に女子を活発で快活にさせるためには身体の健康が必要であ

り、女性にとっても運動が重要であると論じられるようになった。

その一方で、女子の体育は、女子の身体・精神に適合したものでなければならないという見方もあった⁴⁶⁾。従って、身体的・精神的差異がある男女には、それぞれにふさわしいスポーツの必要性が語られ、男女のスポーツは明確に区別されていくことになる。特に女性は、子どもを立派に産み育てる身体をつくるために、過激でない程度の運動が必要であることが強調された。

それでは、女性に適したスポーツは何であろうか。雑誌「体育と競技」の女性スポーツに関する特集号の中で、女子体育の教材については、テニスやバレーボールが過激でない運動として適している³³⁾と記載されている。

同雑誌の中で大谷武一は、女子は、物をまっすぐに投げたり、強く打ったりするような性質を遺伝されていない。ただし、練習次第では、女子でも立派な野球選手になれるが余計に練習することが必要である述べ、女子は、ある時期からは、女子の適した運動を行わすことが重要である¹⁸⁾と訴えている。女性にふさわしいのかという判断は、能不能ではなく適不適の問題と捕えている点が注目される。

また、当時の女子運動競技の総合解説書である「女子の運動競技」の「女子と野球」の項目に、野球は、多少過激であり、危険も伴うが女子に適したように改良すればインドアベースボールのように、女子には最も適切な競技と記載されている³⁷⁾。さらに1924年5月11日の新愛知新聞には、ランニングや野球など筋力や意志力を必要とする運動は女子には適さないという記事があり、過激であること、容姿を損なうなどの女子特性の観点からの指摘が強調されている²⁶⁾。

1925年文部省主催の全国高等女学校校長会議「体育ニ關スル件」において女子野球に関連する問題が取り上げられている。この会議で、インドアベースボールやバスケットボール、スキーが女子には過激であるとして種目採択に際しての考慮を促している。また、女子が足を開いてバットを振るなど最も女子らしからぬ行為として、1926年5月27日発布の「改正学校体操教授要目」には、女子野球のプレーグラウンドボールが不適当な種目とされ、女子教材から削除されている²⁶⁾。

このほか、1922年12月には、熊本県立第一高等女学校との対戦を前に福岡県直方高等女学校の野球部が、福岡県知事から禁止令を出されている³¹⁾。さらに、1926年には、女子の軟式野球が盛んであった和歌山県で、県の学務課が、野球は、女子に不適切、不妊の恐れありとして突然中止命令を出した³¹⁾。

第4節 まとめ

明治・大正時代に女子野球は、インドアベースからキツンボールを経て軟式ボールの開発と共に普及した。当時、一般の人たちの女性観は、女性は男性に従うものであり、女性の天職は子どもを産み育てることであるとする「良妻賢母」を理想とするものであった。このような女性観では、男性と対等にスポーツすることは上下関係を崩すものであり、また、激しい運動は母体に影響を及ぼすと考えられていた。そのような従来の女性観から次第に欧米女性と比べて体力的に遜色のない健康壮健な女性を求める観点から女性身体の改造が言及されるようになる。さらに強壯な兵士になる子どもを産み育てるために女性の健康が国家の威力となると考えられるようになって女性の運動の重要性が論じられるようになった。その一方で身体的・精神的差異のある男女は、それぞれにふさわしいスポーツの必要性が語られ、男女のスポーツは明確に区別されていくようになり、女性には過激でない程度の運動が必要であるということが強調された。このように大正時代の女子野球は、「良妻賢母」という思想的背景や女は「女らしく」という精神的思想から女子には不適と判断され終焉を迎えることになる。

第4章 女子野球の黎明期

第1節 女子野球の復活

太平洋戦争終了後、初めて野球が再開されたのは、大学野球であった。敗戦後間もない1945年10月28日に東京六大学のOB戦が行われた。その約1か月後の11月23日には、同じ神宮球場で戦後初のプロ野球が東西対抗オールスター戦として行われた³⁴⁾。敗戦からわずか3か月、物資も乏しい中で、野球は見事に復活した⁴³⁾。

それからおよそ2年後の1947年8月29日に横浜のルー・ゲーリック・スタジアムにおいて「貿易再開記念大会」と銘打って女子の野球大会が開かれた。この「オール横浜女子野球大会」は、横浜文化祭のイベントとして企画され、製靴会社のオハイオ靴店や、日産自動車、文具メーカーの文寿堂、日本ビクター戸塚、日本ビクター横浜、そしてソフトボールの強豪であり、名古屋高等女学校や今治高等女学校と同様に、早くからキットンボールに取り組んでいたことで有名な横浜女子商業学校の6チームが参加した。この大会がのちの女子プロ野球誕生のきっかけとなる³⁵⁾。

戦後、女子野球が誕生したのは、GHQが占領政策のひとつの柱として、戦前の男尊女卑の伝統を覆す大胆な女性解放政策を打ち出したことが挙げられる⁴³⁾。そのような中、1945年10月には、婦人に参政権が与えられ、翌年の4月の総選挙では36名もの女性代議士が誕生している。大学への女性の入学も認められた。このような女性解放の波の中、男の聖域であった分野にも女性が進出していき、プロレスや競輪、ボクシングなどにも進出した。そして、戦後の人々が、大学野球やプロ野球に熱中している中、人々の野球の思いと女性解放の潮流が重なって女子野球が誕生したのである⁴³⁾。

1948年、「オール横浜女子野球大会」に刺激されて、東京・銀座の「メリーゴールド」というダンスホールが、ダンサーたちに「健康的な野外スポーツをやらせよう」と野球チームを発足する¹⁶⁾。その年の7月には、興行師の小泉吾郎が女子野球の興行的価値を悟り、横浜女子商業の選手たちを集め即席で非公式ながらも最初の女子プロ野球チームである「東京ブルーバード」を結成した。東京ブルーバードは、日本各地を転戦し1試合につき2～3万円のギャラをもらって、一種のショーとして地元の市議会議員や医師会など名士のチームと対戦し、試合が終わった夜は宿舍の旅館やホテルの大広間で、対戦相手の地元の名士たちと交歓パーティーを行っていた。

各地での興行は、若い女性たちが野球をプレーするもの珍しさから大成功を収めた。しかし、地方興行師とのトラブルからチームはあえなく空中分解する¹⁶⁾。その後、1949

年5月には、「ロマンス・ブルーバード」というチームを結成し入団テストを行った。日比谷公園で行われた入団テストには全国各地から約500人の野球少女が集まり、その中から最終的に15名が合格した³⁵⁾。入団テストの際には野球の腕前もさることながら、独身で容姿端麗という点も重視された。選手たちの給料は、高校卒の女性の初任給が約三千円の頃、トップクラスの選手で七千円、平均すると四千円くらいであった¹⁶⁾。

1950年1月にロマンス・ブルーバードに対抗すべく女子プロ野球2番目のチームである「レッドソックス」が誕生する³⁵⁾。レッドソックスに続いて、2月には製菓会社のホームー製菓も「ホームー」というチームを結成し、さらに2月28日には、国際観光の後援で「パールス」が誕生した¹⁶⁾。

4球団が相次いで結成され、女子プロ野球も陣容が整ってきた。そこで、ロマンス・ブルーバード、レッドソックス、ホームー、パールスの球団代表が協議をした結果、連盟組織で運営していくことが決定され¹⁶⁾、1950年3月28日、丸の内の東京會館別館で、ついに女子プロ野球は、「日本女子野球連盟」として発足した³⁵⁾。

女子野球のルールは、女子用に開発された準硬球（トップボール）を使用し、塁間距離85フィート、投手と捕手間は、55フィートと男子の硬式（それぞれ90フィート、60フィート）よりわずかに狭められている程度で、公式戦が9イニング、オープン戦は7イニング制が採用された¹⁶⁾。そして、後樂園スタジアムにおいて、4月7日に連盟結成記念第1回選抜優勝戦が開催されることが発表された³⁵⁾。

第2節 女子プロ野球活況期

1950年4月10日、雨で3日順延になっていた「日本女子野球連盟結成記念主婦と生活社優勝杯争奪トーナメント大会」は、後樂園球場に1万7千人の観客を集めて開催された⁴³⁾。内野席は、ほぼ満員という状態だった³⁵⁾。この大会は、トーナメント方式で行われ、第一試合のロマンス・ブルーバード対レッドソックスは、14対2でブルーバードが大勝した。第二試合は、パールス対ホームーでホームーが6対0で快勝した。第三試合は、それぞれ勝ち上がったブルーバードとホームーが戦い12対1でブルーバードが勝ち初の優勝旗を手にした¹⁶⁾。

この大会の後にも7月に「読売優勝杯争奪戦」が、さらに8月には初めての「東西対抗戦」が後樂園球場で開催され、それぞれ1万8千、1万という観衆を集めた。さらに10月には、関西に場所を移し、大阪、京都でもトーナメント大会が開催されている。

当時は、野球が爆発的な人気を獲得していた時代ではあったが、巨人対阪神などの一部の人気カードを除けば、男子のプロ野球でも球場に1万人を集めるのは難しい時代であり、女子プロ野球は、多くの観衆を集めていた⁴³⁾。

1950年は、朝鮮半島で動乱が勃発し、アメリカからあらゆる分野の製品の注文が日本に殺到した、いわゆる特需景気である。このような好況に沸く日本の中で女子野球は、時代の先端をいく娯楽として受け止められていた。女子プロ野球開幕のニュースは、あつという間に女子野球ブームを全国に広げ、多くの女子野球チームが結成されるようになった⁴³⁾。エーワン・ブリアンツ、ローズ球団、クロス・スターズ、京浜ジャイアンツ、名古屋レインボー、滋賀レーク・クイン、京都ヴィナース、京都ラアミーズ、大阪ダイヤモンド、神戸タイガースといった球団が誕生し、最盛期には、25チームを数えた¹⁶⁾。

こうした中、1950年7月に、ロマンス・ブルーバードのオーナーである小泉吾郎は連盟との対立から、日本女子野球連盟を脱退することを表明した。小泉の「エンタテイメント路線」に対し、連盟事務局長の斎藤弘夫は、「健全スポーツ」として女子野球を捉えており、野球そのものに対する視点の違いから意見が対立していた。そして、8月には、ロマンス・ブルーバードは、連盟との方針の違いから脱退し⁴³⁾、代わりに、連盟の方針に従って誕生した「わかもとフラビンズ」が加盟し、日本女子野球連盟は、再編成された³⁵⁾。

新連盟は、「わかもとフラビンズ」「富国ホーム（母体がホーム製菓から富国興業に移行）」「日産パールズ（母体が国際観光から日産グループに移行）」「三共レッドソックス」の4球団に加え、関西から「神戸タイガース」「滋賀レーク・クイン」「京都ヴィナース」「京都ラアミーズ」の4球団、さらに関東では「エーワン・ドラゴンズ」「京浜ジャイアンツ」「クロス・スターズ」の3球団が加入し、合計11球団で連盟は結成された³⁵⁾。

一方、日本女子野球連盟を脱退したロマンス・ブルーバードは、9月に新たに「名古屋レインボー」や「大阪ダイヤモンド」さらには、日本女子野球連盟を早々に脱退した「京都ラアミーズ」「神戸タイガース」など11チームで「全日本女子野球連盟」を結成した。小泉は、この全日本女子野球連盟を隆盛に導き、三共レッドソックスやパールズの「健全スポーツ派」にひとあわふかせたいと考えていたが、ロマンス・ブルーバードの主力選手の相次ぐ移籍で、ブルーバードは解散を余儀なくされ、全日本女子野球連盟もほどなく消滅した¹⁶⁾。

このようなめまぐるしい動きの中、収支の低迷から女子野球を見限る企業が現れ始める。経営基盤の脆弱な企業や明確なビジョンを持たずブームに便乗して名乗りをあげた企業が早々と女子野球から撤退していった⁴³⁾。当時、男子のプロ野球もほとんどの球団が経営難に喘いでいる中で、発足間もない女子プロ野球のチームが経営難に陥り多くのチームが誕生しては消滅していったのは当然のことと言える⁴⁶⁾。

連盟の再編やチームの新陳代謝は、観る者を混乱させた。そこに、男性のプロ野球と比べた場合の技量の拙さも加わって、人々は女子野球に幻滅を感じ始める。こうしてこの年の夏をピークに女子野球人気は早くも下降線を描き始めた⁴³⁾。

1950（昭和 25）年終了時に日本女子野球連盟に残ったのは、「わかもとフラビンズ」「岡田バッテリーズ（パールスが岡田乾電池を後援にして名称変更）」「三共レッドソックス」「京浜ジャイアンツ」の5チームであった³⁵⁾（図4参照）。

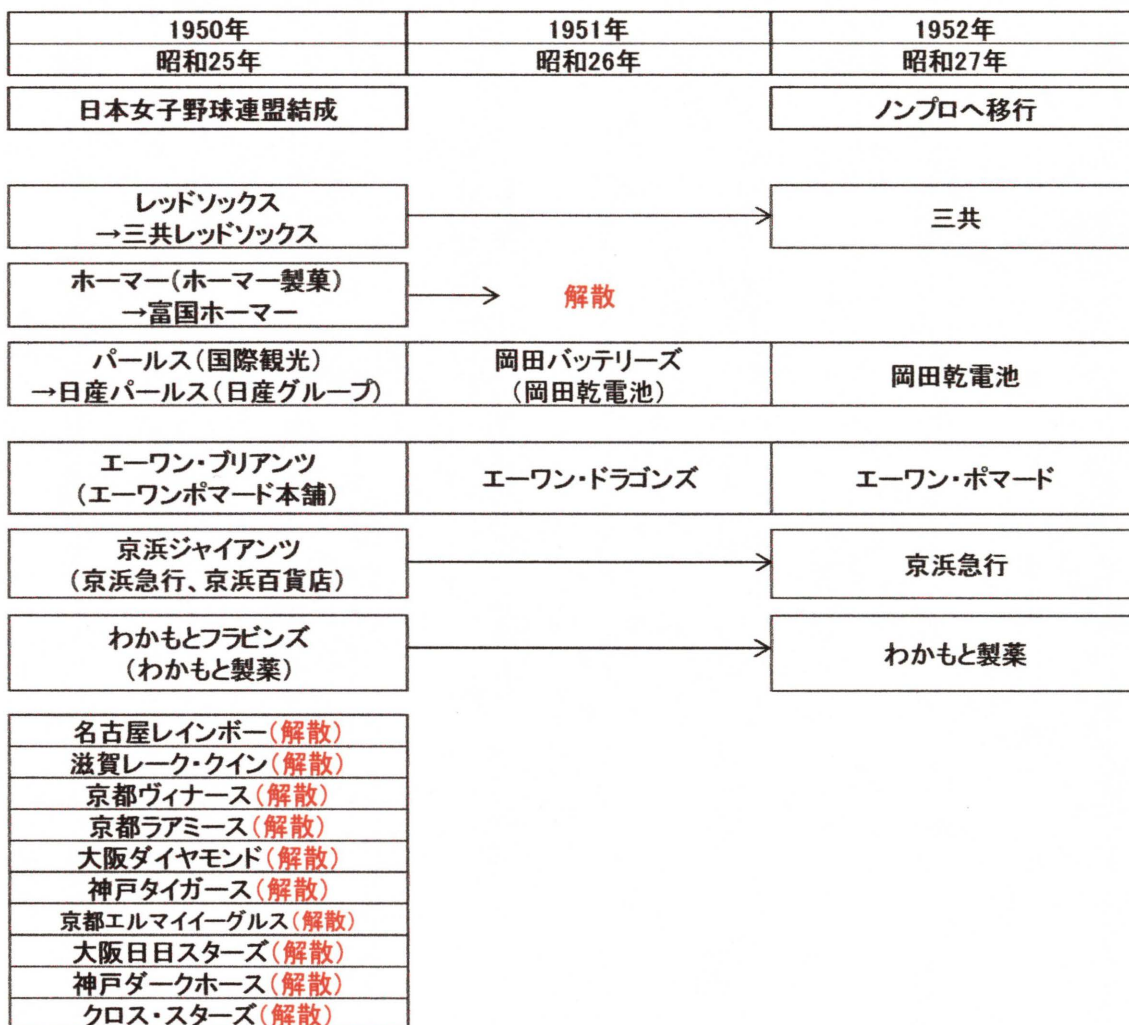


図4. 日本女子野球連盟結成からノンプロ移行までのチーム変遷

(谷岡雅樹 「女子プロ野球青春譜 1950～戦後を駆け抜けた乙女たち～」2000 等より筆者作成)

第5章 女子野球の転換期

第1節 社会人野球への移行

1951年から、女子野球は前年に行われていたトーナメント方式の大会に加えて、総当たり制のリーグ戦が開催されることになった。リーグ戦は、前期と後期に分かれており、前後期の各優勝チームが日本選手権を賭けて、プレーオフで覇を競うものであった。男性プロ野球に比較して規模は小さいが、年度優勝に向けて各チームが競い合うことから、ペナントレースと呼べるものであろう。このペナントレースは、急激に下降線をたどっていた女子野球の危機的状況を打開し、女子野球を興行よりも「健全スポーツ」として、社会に定着させようという関係者の思いが具現化されたものであり⁴³⁾、前年の場当たり的な興行に男性プロ野球のような形式を持たせることで、スポーツとしての基盤を固めようとしたのである。その後、1952年に女子野球は、プロからノンプロ組織へ移行したが、このペナントレース方式は、その後の女子野球の様式として定着する⁴³⁾。

1952年、ノンプロへの移行を機に「健全スポーツ」を謳う日本女子野球連盟は、規約を改定し、連盟は、加盟各社の女子野球部で構成された組織体として、各社女子野球部は各社の社員で構成され、選手は社員としてそれぞれ定職があり、シーズン中でも午前中は社業に従事し午後だけ活動するというように規定した⁴⁶⁾。

また、日本女子野球連盟の「女子野球（ノンプロ）に就いて」と題した声明文⁴⁶⁾の中で、連盟の目標を他のアマチュア・スポーツ同様、各所属会社の社員としての定職を持ちつつ、趣味として野球を行い、かたわら洋（和）裁、華（茶）道、料理等一般家庭婦人としての教養を身につけ、心身共に健全なる新妻としてゴールインさせる事と謳っている。この声明文からもわかるように、日本女子野球連盟は野球を「趣味」「花嫁修業」の一種と考え、最終的には「心身共に健全なる結婚」を目標に掲げている。連盟は、戦後の女性解放の潮流の中で経済的な自立を目指していた女子野球の選手たちを戦前の「良妻賢母」思想へと封じ込める方針をとったのである⁴⁶⁾。

こうして女子野球は、ノンプロ組織へと移行し、経営母体となる企業にとってチームの位置づけも興行から宣伝へと変わっていき、女子野球が企業のビジネス・システムの中に取り込まれ始めた。選手たちは、ペナントレースやトーナメント大会の試合と併行して、企業の得意先の男性チームと対戦して回るようになった。ペナントレースで企業名をPRすると共に、動くPR部隊として大きな宣伝効果を挙げた⁴³⁾。

一方、今まで明日をも知れぬ状況でプレーをしていた選手にとっては、ノンプロへの

移行により、安定して野球に取り組める環境へと状況は変化し、このノンプロ時代に女子野球は飛躍的に技量を向上させることになった⁴³⁾。当時のスポーツ新聞には、ボールを投げたり受けたりする技術はすでに目標としている高校2年程度の域に達していると書かれている⁴⁰⁾。

1953年には、ノンプロスポーツとして女子野球は活況を呈した。日本の社会は戦後の混乱期を脱し、後の高度経済成長につながる消費構造が形成され始め、こうした時代変化に対応して企業でも、宣伝活動を経営戦略の中に取り込むようになった。そのような中で、効果的な宣伝手段として女子野球を見直す企業も現れ始めた。この頃、日本女子野球連盟の事務局長は、「女子野球のPR的価値は、ユニフォーム、道具類にかかる経費をカバーして、十分に余りある事は実績からハッキリしている」と述べている⁴¹⁾。

この年のチームは、岡田乾電池、京浜、エーワン、わかもと、三共、紅梅キャラメルの6チームでペナントが争われた。紅梅キャラメルはわずか1年で女子野球から撤退したが、チームは同じ製菓会社の坂口翁に引き継がれ、1955年まで6チーム制が維持され、この頃のペナントレースは熾烈を極め、女子野球には活気がみなぎっており⁴³⁾、当時の東京スポーツには、「正に女子野球戦、佳境に入るといった感がある」⁴²⁾と書かれている。

第2節 女子野球の終焉

1958年は、立教大学の長嶋茂雄を筆頭に、プロ野球界に即戦力の新人が続々を入団した¹⁶⁾。さらに一本足打法の王貞治がホームランを量産し始め、ON時代を築いていた。相撲界では、大鵬が圧倒的な強さを誇り「巨人、大鵬、卵焼き」という言葉も生まれたほどである。昭和30年代後半は、日本経済の高度成長が本格化し始め、1964年には、東京オリンピックの開催も決定して、新幹線や高速道路の工事が急ピッチで進められ、日本は急激に変貌していった。人々の暮らしも大きく変化し、テレビ、電話、冷蔵庫などの高級品と思っていた製品が家庭に持ち込まれ始めた。

このような日本経済の発展と共に、メディアと連携して、プロ野球や大相撲が爆発的な人気を集め、ビジネスとしての市場を拡大した。そのような中、女子野球の人気にも陰りが見え始めてきた⁴³⁾。

宣伝部隊として企業のビジネスシステムに取り込まれた女子野球は、企業が国内販路の拡大を急いだ昭和30年代始めに隆盛を迎え、それが一段落した30年代半ばから沈滞

期にさしかかった。その頃になると、企業は海外市場の拡大に乗り出し、女子野球界ではビジネス活動の尖兵として、海外遠征の機会が増えた。しかし、それも長くは続かなかった。女子野球を取り巻く環境は急速に冷え込んでいった。娯楽が多様化し、メディアや通信手段が発達するにつれて、女子野球が宣伝効果としての意味を持たないようになっていった。

昭和 40 年代に入るとその傾向は一層顕著となり、1968 年になると、日本女子野球協会（日本女子野球連盟が 1959 年に解散しその後を受けて発足）の加盟チームは、三共とサロンパスの 2 チームだけになった。そして、1970 年 11 月に三共女子野球部が解散した。翌年、2 月にサロンパスがチームを解散し、昭和 20 年代半ばに誕生し、20 年余りにわたって続いていた女子野球の歴史は幕を閉じた⁴³⁾。

第 3 節 まとめ

戦後、GHQにおける女性解放政策を受けて、従来進出していなかった分野へ女性が進出した。プロ野球が復活し空前の野球ブームが到来し、野球界にも女性が進出するようになり、女子プロ野球が誕生した。戦後間もない女子野球は学生野球の基盤もなく、いきなりプロとして組織され、経験者も少なく技術も未熟であったことからプロ野球としては定着せず、すぐにノンプロ組織へと移行する。そこで女子野球の宣伝効果に目を付けた企業によりビジネスシステムに組み込まれた女子野球は活況を呈することになった。しかし、高度経済成長に伴い国民の娯楽も多様化し、宣伝媒体としてテレビなどのメディアも発達し、宣伝としての女子野球の効果も薄れてきたことから 1971 年に再び消滅した。戦後間もない女子プロ野球は組織が杜撰で技術も未熟であった。また、ノンプロとしての女子野球は、スポーツとして、一個の文化として捉える視点に企業も社会もなかった⁴³⁾。このようなことから女子のスポーツとして定着しなかったと言える。

第6章 近年の女子野球

第1節 再び女子野球の復活

(1) 女子野球チームの誕生

当時人気を獲得していた女子プロレスのビューティー・ペアの野球版を目指して、1978年2月にフジテレビが「ニューヤンキース」という女子野球チームを結成し、再び女子野球は注目を集め始めた¹⁶⁾。

1974年に巨人軍の長嶋茂雄が現役を引退して以来、プロ野球がいまひとつ盛り上がり欠けていた。しかし、1977年に王貞治がハンク・アーロンの持っていた本塁打の世界記録に肉薄し、更新したことを契機にプロ野球人気は上昇に向かった。少年漫画でも野球漫画が人気を獲得し、水島新司の「野球狂の詩」は、水原勇気という少女投手を登場させ、爆発的な人気を獲得し、映画化もされた⁴³⁾。

そのような中で、フジテレビのニューヤンキースは大きな反響を呼んだ。新聞やメディアを通して選手を公募すると、小学生からOLまで3,240人もの応募者が殺到した。その後、実技テストを行いメンバーを決定した。合格したメンバーは、中学生、高校生、大学生、OL、さらには、最年長は22歳の家事手伝いの女性というように女子野球の人气が広範囲に及んでいた⁴³⁾。

ところが、平均視聴率が8パーセントと低迷し、1979年3月で解散に追い込まれることになった¹⁶⁾。しかし、ニューヤンキースの結成が元女子プロ野球選手たちにも強い刺激を与え、プロやノンプロ時代の選手を集めてふたつの女子軟式野球チームが結成された¹⁶⁾。さらに、1980年には、兵庫県神戸市の神戸山手女子短大が全国初の女子大学野球部を設立した。

1チームでは対戦相手がないので神戸山手女子短大の監督が慶応大学時代の恩師である池田弥三郎教授に頼み、池田が主任教授を務めていた富山県魚津市の洗足学園魚津短大にも野球部が設立され、翌1981年4月に両校による「池田杯争奪女子野球定期戦」が始まる。この神戸山手女子短大と洗足学園魚津短大の定期戦をきっかけに全国の女子大学に野球部が結成され、1986年8月1日に全国大学女子軟式野球連盟が結成された¹⁶⁾。

(2) 野球協約の改正

1991年、プロ野球機構は、これまで、日本プロフェッショナル協約第83条「不適格選手」の項に明記してきた「医学上男子でないもの」という条項を削除した。その年の

10月13日に行われたオリックス球団の入団テストに2人の女性が参加した。結果は不合格であったが、この改正によって野球協約上は女性の登録も可能となった¹⁶⁾。

(3) 大学野球における女性選手

大学野球においては、1994年に明治大学硬式野球部に入部したジョディー・ハーラー選手が、1995年9月19日、長い歴史を持つ東京六大学史上、初めて公式戦のマウンドに登った。秋季リーグの東京大学戦で初登板し、1回2/3を投げて打者11人に5四死球、被安打0の無失点で途中降板した⁶⁾。2001年5月28日には、東京六大学野球の春のリーグ戦で、明治大学の小林千紘選手と東京大学の竹本恵選手が先発して投げ合いを演じた。両チーム共に優勝の可能性がなくなったリーグ戦終盤での消化試合ではあったものの、予告先発的に行われた「女性投手対決」は、翌日のスポーツ紙の一面で取り上げられたようにかなりの注目をあびた³⁸⁾。両投手が先発した試合は、10対0で明治大学のワンサイドゲームとなったが、明治の小林は、3イニングを投げて被安打2、与四球2、三振1で無失点、東大の竹本は、1回1/3を投げて被安打4、自責点2で敗戦投手となった。人気低迷していた東京六大学野球において、話題作りのための「客寄せの見せ物」との批判的な意見もあったが、偶然にも同じ時期に二人の女性選手が東京六大学野球リーグに所属したことは歴史的な出来事であったと言えよう。³⁸⁾

小林と竹本の登場以降、東京六大学野球で女性選手が出場する機会は生まれていない。2012年に慶応大学硬式野球部に高校時代に女子硬式野球で活躍した川崎彩乃選手が入部した。今後、リーグ戦に出場できる機会があるか注目される。

(4) 社会人野球、プロ野球（独立リーグ）における女性選手

2005年には、片岡安祐美が社会人クラブチームの茨城ゴールデンゴールズに入団した。2009年には、関西の独立リーグの神戸9クルーズに吉田えりが入団し、男性と同一チームでプレーする初めての女子プロ野球選手となった。

このように、2000年以降、男子に交じってプレーする女子の選手が目立つようになったことから女子の野球への参加が少しずつ増えてきていることがわかる。そして、ついに2010年に関西で女子プロ野球リーグが開幕を迎えた。

第2節 女子プロ野球リーグの創設

(1) 女子プロ野球の誕生

2009年8月に「株式会社日本女子プロ野球機構」が設立され、関西の2チームで2010

年4月に女子プロ野球リーグが開幕されると発表された。リーグ創設の目的は、野球を続けて行きたいと願う女子野球選手に野球に専念できる新たな環境を提供し、また、女子硬式野球の競技レベルの向上を目指す⁵²⁾というものである。

(2) 女子硬式野球の歴史

ここで、女子のプロ野球リーグが創設されるまでの女子の硬式野球について振り返ってみたい。かつて戦後間もなく存在した女子プロ野球は準硬式球を使用していたので日本における女子の硬式野球は、高校から始まることになる。1997年4月、鹿児島県の神村学園高等部に女子硬式野球部ができたことに始まり、その年に第1回全国高等学校女子硬式野球大会が開催された。その時の参加校は、駒澤学園女子高校、蒲田女子高校、埼玉栄高校、花咲徳栄高校、神村学園高等部のほか、地元兵庫県ソフトボール女子の超名門・夙川学院高校の6校で、このときは夙川学院高校が優勝したのである。女子硬式野球のレベルはソフトボールに追いついていなかったことがわかる。

そして、次に大学の女子硬式野球部が現れた。中京女子大学が、2005年4月に全国初の大学女子硬式野球部を創設し、男子のリーグに加わって戦い始めた。中京女子大学に次いで2006年、尚美学園大学に女子硬式野球部が誕生し、2007年には平成国際大学、2008年の南九州短期大学、2009年の大阪体育大学、2010年の成美大学と毎年増えていった。一般のクラブチームも、札幌から鹿児島まで各地にチームが結成されていった。このような流れが、2010年の女子プロ野球リーグ開催につながったと言える³⁶⁾。高校、大学、社会人のチームが誕生し、その頂点としてプロができるのは必然の結果と言える。

(3) 女子プロ野球リーグ設立の意味

しかし、女子野球のチームが増えていったとは言え、まだまだ競技人口も少なく、決してメジャーなスポーツとは言えない女子野球が「何のために、どうしてこのタイミングで」プロ野球リーグ設立だったのであろうか。

女子プロ野球リーグは、「わかさ生活」が支援をしている。わかさ生活は、朝日放送の全国高等学校野球選手権大会中継のメインスポンサーに名乗りを上げ、夏の甲子園大会のCMで一気に知名度を上げていた。そのわかさ生活の社長である角谷建輝氏は、2007年4月に故郷である兵庫県丹波市で開催された全国高等学校女子硬式野球選抜大会を観戦し、女子野球の選手たちの置かれた野球環境が決して恵まれたものではなく、しかも野球を目指した女子の大多数が、「女の子に硬式野球は続けられない」「女の子は甲子園に行けない」「女の子はプロ野球選手になれない」と、夢を諦めざるを得なかつ

た現実を知らされ、女子野球への支援を決意する。

まず、角谷氏は、「10年で、女子硬式野球部のある高校を5校から30校に増やす。そして、その30校の頂点を、夏の高校野球の50校目として加えてもらう」という目標を立てた。母校の福知山成美高校の理事として同校に女子硬式野球部を設立し、同時に、女子野球の裾野を広げるために、全国の中学・高校にも硬式の野球部を呼びかけたが、関係者に掛け合い、話を聞くうちに、これでは「目標の実現に時間がかかりすぎる」ということを実感した。次第に「女子は女子同士で野球がやりたい」ということもわかってきた角谷氏は、底辺の拡大がダメならば「だったら、いっそ女子のプロ野球リーグを立ち上げよう」という斬新な発想を思いついた。まずは目指すべきトップを作ることで裾野を広げていくという戦略に転換した。この戦略に基づき、女子のプロ野球リーグが設立されることになるのである³⁹⁾。

(4) 女子プロ野球リーグの理念と構想

女子プロ野球リーグの理念は、女子選手の目標となる頂点の確立、競技レベルの向上、女子野球の普及、地域貢献、選手のライフデザインの形成⁵²⁾である。選手はセカンドキャリア支援の一環として球団が指定する専門学校へ入学し、全選手が「柔道整復師」の資格取得を目指し、プロ野球選手として引退を余儀なくされた後のライフデザインの形成を視野に入れているところに特色があると言える。

また、リーグの構想として、「女子野球」の魅力の発見・創出、女子野球の認知と競技人口の拡大、環境の整備を掲げている³⁶⁾。

このような理念と構想を掲げて2010年に開幕した女子プロ野球リーグの最初のシーズンの1試合平均観客数は1,535人⁵²⁾であった。翌年の2011年のシーズンは、1試合平均観客数が1,709人⁵²⁾と増加傾向にある。女子野球の魅力が少しずつではあるが定着してきたと言える。そして、2012年のシーズンからは、1チーム増やして3チームでリーグ戦を開催している。この年には、女子野球の普及と選手の育成を目的として、ユースチームも設立している。さらに2013年のシーズンに向けて東京に女子プロ野球の球団を創設することが決まっている。このようにリーグ設立発表ときに掲げた構想の実現に向けて着実に進んでいると言える。

第3節 女子野球の現状

(1) チーム数と競技人口

女子プロ野球以外の女子野球の現状はどのようになっているのであろうか。全国高等学校女子硬式野球連盟のホームページによると、2012年4月時点で、9チームが加盟しており、その他学校にチームのない高校生のための連合チームが1チーム大会に参加している⁵⁵⁾。

硬式の大学・専門学校・一般クラブチームは、日本野球協会のホームページによると2012年8月時点で32チームである⁵³⁾。全日本女子軟式野球連盟に所属するチームは、ホームページによると2012年5月現在、一般のクラブチームが65チーム、中高生のチームが26チームで合計91チームである⁵⁷⁾。さらに全国大学女子野球連盟には、全日本大学女子野球選手権大会 魚津市実行委員会のホームページによると26校の登録がある⁵⁶⁾。全国で硬式・軟式あわせて161チーム（連合チーム除く）の女子野球チームが存在し、日本女子野球協会のホームページによると約3,000人以上（硬式は約1,000人）の競技人口がいると推測される⁵³⁾。

しかし、上記の競技人口には、学童の女子野球人口が入っていない。女子の学童野球の競技人口の把握をしている団体はないのだが、フリーライターで女子野球の取材を続けている飯沼素子が「がんばれ！女子野球」というホームページの中で女子野球人口について調査を行った結果が掲載してある⁴⁷⁾。それによると軟式野球では、「全日本女子軟式野球連盟所属のチーム（一般と中高生チーム）」＋「所属外のチーム」＋「中学野球部」＋「一般中学クラブチーム」＋「全日本大学女子野球連盟所属チーム」＋「学童チーム」の選手数を推計し、合計している。硬式野球では、「プロ野球」＋「一般クラブチーム」＋「中高生チーム」＋「高校野球部」＋「大学野球部」＋「中学硬式リーグ」の選手数を推計し、合計している。また、軟式、硬式の両方に登録しているチームはダブルカウントしないようにし、高校硬式野球部のように大所帯のチームは、2011年度の所属選手数や取材したときの数字を使って計算している。その結果、軟式野球約18,000人、硬式野球約1,300人、合計約19,300人という競技人口を推計している。それでも、男子と一緒にクラブチーム、高校、大学でプレーしている女子選手の数は、推計不可能で入っていないが、実態に近い数字と言える。

女子サッカーの競技人口と比較してみると、女子サッカー人口は、女子チームに所属している女子選手の数26,237人、女子チーム以外の第1、2、3、4種、シニアに所属している女子選手の数12,651人の合計約39,000人⁴⁷⁾であることから、女子野球人口は、女子サッカーの半分にも満たないことがわかる。

しかし、日本中学体育連盟の部活動調査集計における加盟生徒数の推移⁵⁰⁾によると、女子軟式野球の加盟生徒数は、2007年の855人から2011年には、1,658人と約倍増している。女子サッカーの加盟生徒数が、同じ時期に3,422人から3,946人の増加にとどまっているのに比較して中学での女子野球の競技人口は部員数だけを見れば飛躍的に増加していることがわかる。一方、同じベースボール型のスポーツのソフトボールは、同じ時期の調査で59,049人から53,821人と減っているものの部員数は圧倒的に多く（表2参照）、ソフトボールが女子のスポーツとして定着していることがわかると共に学童期に野球をプレーしていた女子の多くが中学校でソフトボールへの転向していることが伺える。

表2 部活動加盟生徒数（女子）の推移

	平成19年	平成20年	平成21年	平成22年	平成23年
野球	855	1,137	1,333	1,505	1,658
サッカー	3,422	3,518	3,429	3,538	3,946
ソフトボール	59,049	58,056	57,472	54,696	53,821

（日本中学体育連盟 部活動調査集計より筆者作成）

（2）女子野球の団体

女子野球の団体と大会でみると、団体は、大きく分けて軟式と硬式の団体に分かれる⁴⁷⁾。軟式の女子野球団体は、クラブチームを束ねている全日本女子軟式野球連盟と大学チームを束ねている全日本大学女子野球連盟の2つの大きな団体がある。全日本女子軟式野球連盟の大会としては、全日本女子軟式野球選手権大会が、東京都の江戸川区で開催され軟式女子の憧れの大会となっている。全日本大学女子軟式野球連盟の大会としては、全日本大学女子野球選手権大会が富山県の魚津市で開催され大学選手の大きな目標となっている。さらに両連盟が主催となり、軟式の頂上決戦としてクラブチームと大学チームの各全国大会優勝チームが戦うジャパンカップ（女子軟式野球王座決定戦）が行われている。

硬式の女子野球団体は、大きく分けて4つの団体がある。日本女子野球協会は、硬式と軟式をあわせて唯一、全日本アマチュア野球連盟に所属する女子野球団体で、日本代表チームの編成、派遣のほか、女子野球の普及活動を行い、全国のクラブチームや学校のチームが参加して戦う全日本女子硬式野球選手権大会を松山市で開催し、クラブチー

ムの日本一を争う全日本女子硬式クラブ野球選手権大会を市原市で開催している。

日本女子プロ野球機構は、公式戦を行うと共に女子野球の普及活動を行っている。全国高等学校女子硬式野球連盟は、高校チームを束ね、女子高生の春の大会として全国高等学校女子硬式野球選抜大会を丹波市で開催している。また、通称「女子高生の甲子園」と呼ばれる全国高等学校女子硬式野球選手権大会を同じ丹波市で開催している。

関東女子硬式野球連盟は、関東のクラブチーム、大学チーム、U18 チームを束ね、18歳以下の全国大会である全日本女子硬式野球ユース選手権大会や読売巨人軍が後援する関東地方大会として春秋2回、ヴィーナスリーグを開催している。さらに2011年からは、日本女子プロ野球機構が主催し、サッカーの天皇杯のような大会を目指し、女子プロ野球チームとアマチュアの上位チームが女子硬式野球日本一をかけて行う女子野球ジャパンカップが開催されている。

(3) 学童野球

小学生を対象とした学童の女子野球チームが全国で一番多い東京都の状況を紹介してみたい。2012年から前年まで江戸川区で開催されていた東京都学童女子軟式野球大会に代わり、東京都知事杯第1回東京都女子学童軟式野球大会が新設された。前年、江戸川区で開催された大会は15チームの参加であった。記念すべき第1回大会は、29チーム約500人の女子選手が参加する大会となった。また、2007年に4チームでスタートした府中市学童連盟主催の学童女子軟式野球交流大会は、5回目を迎えた2011年には、参加チーム数が19チームとなり、都知事杯に触発されたように2012年の大会は、25チームの参加となっている。さらに学童の女子を対象として2009年に始まった三多摩女子大会(軟式)も2012年の大会の参加チーム数は21チームというように軒並み大会へ参加する女子の学童野球チームが増えている。

(4) 女子野球日本代表の成績

最後に日本代表女子野球チームの国際大会での活躍を記載しておく。2004年から国際野球連盟(I B A F)が主催する女子野球の世界カップが開催されている。第1回、第2回大会は、いずれも米国が優勝し日本は準優勝であったが、2008年に日本で開催された第3回大会から2012年にカナダで開催された第5回大会まで3大会連続して優勝している(表3参照)。

表3 女子野球日本代表の世界大会での成績

開催年	大会名	開催国	参加チーム	成績
2001年	第1回女子野球世界選手権	カナダ	4チーム	2位
2002年	第2回女子野球世界選手権	アメリカ	4チーム	2位
2003年	第3回女子野球世界選手権	オーストラリア	3チーム	優勝
2004年	第4回女子野球世界選手権	日本	8チーム	優勝
2004年	第1回IBAF女子W杯	カナダ	5チーム	2位
2006年	第2回IBAF女子W杯	台湾	7チーム	2位
2008年	第3回IBAF女子W杯	日本	8チーム	優勝
2010年	第4回IBAF女子W杯	ベネズエラ	11チーム	優勝
2012年	第5回IBAF女子W杯	カナダ	8チーム	優勝

(日本女子野球協会等の資料より筆者作成)

第7章 ベンチマークとしての女子サッカー

野球以外のスポーツで女子スポーツの状況を考察してみたい。野球と同じように長い間、男のスポーツと思われてきたサッカーが近年、なでしこジャパンの活躍により一躍女子のスポーツとして脚光を浴びるようになった。現在の女子サッカーの人気の陰には、不遇な時代を経験する中で普及、強化のために様々な取り組みが行われてきた。日本サッカー協会の取り組みには以下のようなものがある。

(1) キャプテンズ・ミッション (プレジデント・ミッションへ改称)

2002年10月に日本サッカー協会は、サッカーの普及とスポーツ環境の充実を目指し重点的に取り組む施策を掲げた。「キャプテンズ・ミッション」と呼ばれるこの施策は、各種登録制度の推進、芝生等の環境整備、競技会の充実、中学生年代や女子サッカーの活性化、フットサルの普及促進など、日本サッカー発展のためのミッションが掲げられている。その後、「JFA2005年宣言」の実現に向けて、新たな課題を付加して「プレジデント・ミッション」に改定した。以下は、重点施策に掲げられている11のミッション⁵⁴⁾である。

- ミッション1 : 「JFAメンバーシップ制度」の推進
- ミッション2 : 「JFAグリーンプロジェクト」の推進
- ミッション3 : 「JFAキッズプログラム」の推進
- ミッション4 : 中学生年代の活性化
- ミッション5 : エリート養成システムの確立
- ミッション6 : 女子サッカーの活性化
- ミッション7 : フットサルの普及推進
- ミッション8 : リーグ戦の推進と競技会の整備・充実
- ミッション9 : 地域/都道府県協会の活性化
- ミッション10 : 中長期展望に立った方針策定と提言
- ミッション11 : スポーツマネジメントの強化

この中のミッション6における女子サッカーの活性化は、女子の競技人口の拡大を目指し、登録選手数が少ない中学生年代および18歳以上の年代に着目し、女性が親しみやすいサッカー環境の整備・提供およびプレーの機会創出に努め、これらの活動を通じ

て女子サッカー全体の発展・強化へ繋げる⁵⁰⁾というものである。

(2) なでしこ vision

2007年日本サッカー協会は、女子サッカーの発展のために、そして「JFAの理念、ビジョン、約束」を実現するために、「世界のなでしこになる」というビジョンのもと、女子サッカーに関わるすべての人々が共有し、遂行する3つの目標⁵⁰⁾を定めた。

1. サッカーを日本女性のメジャースポーツにする。

2015年、女子のプレーヤーを300,000人にするために、国内大会の抜本的改革の検討や小中学生世代への普及プログラムを検討し、女子サッカーの認知度を上げるために積極的な情報発信を行い「なでしこ＝日本女子サッカー」のイメージを定着させるための「なでしこ」の活用を行う。

2. なでしこジャパンを世界のトップクラスにする。

日本をFIFAランキングトップ5にするためにU-20/U-17ワールドカップには必ず出場しワールドカップ/オリンピックでベスト4に進出する。

3. 世界基準の「個」を育成する。

各年代日本代表選手につながる、タレントの発掘・育成システムを整備し、また、女子に携わる指導者のレベルアップを図る。

これらの目標のもと、日本の女子サッカーは、2011年ドイツ女子W杯で優勝し、2012年のロンドンオリンピックでも銀メダルを獲得した。FIFA女子ランキングも2012年8月17日時点で、第3位と既に成績面では目標を達成している。このような国際大会での活躍により、「なでしこ＝日本女子サッカー」のイメージを定着させた。

(3) 中学校女子サッカー活性化プロジェクト

2012年4月に日本サッカー協会は、中学校期における女子サッカーの活動の場を増やし、文部科学省「運動部活動地域連携再構築事業」と連携して、「中学校女子サッカー活性化プロジェクト」を発足させ、新しい形態による運動部活動の活性化を検討している。

このような地道な活動が現在のなでしこジャパンの活躍に繋がっており、女子サッカーの人気にも繋がっている。一昔前は、野球と同じように男子のスポーツとして思われ、現在も男子のスポーツとしては野球と人気を二分しているサッカーだが、女子のスポーツとしての人気も高い。同じ女子スポーツとしてサッカー協会の取り組みやシステムは

参考となると考えられる。

第8章 結 論

第1節 歴史的背景と現状との比較

女子野球の歴史を考察してきたが、女子野球は一時的に人気を獲得しては、衰退、消滅を繰り返してきた。女子プロ野球リーグが開催されようになった現在は、3回目の女子野球ブームが到来していると言える。現在では各種格闘技やラグビーなど、かつて女性が参加していないような種目にも女性が参加するようになった。

近代オリンピックの創始者であるピエール・ド・クーベルタンは、女性のオリンピック参加に反対しており³²⁾、第1回アテネ大会での女性種目はゼロであったが、2012年のロンドン大会では、すべての種目で女性が参加するようになった。日本でもサッカーの「なでしこジャパン」やレスリングなどに代表されるように女子選手の国際大会での活躍が目立ってきている。このような状況から、大正時代に女子野球定着の足かせとなった「良妻賢母」という思想的背景や女は「女らしく」という精神的思想から女性がスポーツに参加できなかつたり、激しいスポーツは女性には不適とされる時代ではなくなったと言える。

また、組織が脆弱で野球経験者も少なく技術も未熟であった戦後の女子プロ野球と違い、2010年に開幕した女子プロ野球は、高校、大学、社会人のチームが増えていく中で、その頂点としてプロができたと言える³⁶⁾。女子野球の競技人口は、まだまだ少ないが、その到達点として頂点をつくるというのは必然の流れであった。

その過程において、2001年に明治大学の小林千紘選手と東京大学の竹本恵選手がリーグ戦で東京六大学史上初めて女性投手同士が投げ合いを演じた。そして2005年には片岡安祐美選手が社会人チームに入団し、2009年には吉田えり選手が独立リーグに入団し男子の選手に混じってプレーしている。このように2000年以降の女性選手の活躍が女子野球をスポーツとして捉えるきっかけになったと言える。以上のように現在の女子野球を取り巻く環境は、過去に一時的人気を獲得しては衰退、消滅していった時とは時代的背景も異なっていると言える。

第2節 問題点と解決策

女子野球の現状で最大の問題点は、女子野球の置かれている環境が恵まれていないということである。小学校、何とか中学校まで男子に混じってプレーをしていても必ず大きな壁にぶち当たる。それは、「どんなに頑張っても男子と一緒に甲子園のグラウンドを

目指すことはできない」、「中学・高校の野球部に入部できない」、「プロ野球選手になれない」というものである。学童期に野球チームに入っていた多くの女の子たちが、中学や高校進学の際に野球を続けることを諦め、ソフトボールへと転向したり、他のスポーツへ移行している³⁹⁾。

このような問題を解決するにあたり、サッカーのシステムに学ぶところが多い。

女子サッカーは、なでしこ vision の目標のもとで成績面では目標を達成し「なでしこ＝日本女子サッカー」のイメージを定着させた。女子野球は、IBAF ワールドカップ 3 連覇など成績面では女子サッカーに劣らない実績を残しているにもかかわらず、「マドンナジャパン＝日本女子野球」というイメージは定着していない。女子サッカーと同様に女子野球に関わる全ての人たちが共通の認識を持って、目標に向かって進んでいくようなビジョンが女子野球にも必要である。

また、サッカー協会が取り組んでいる「プレジデント・ミッション」や「中学校女子サッカー活性化プロジェクト」は、女子野球においても中学生世代での競技人口の減少が問題として挙げられている中で、参考となる取り組みである。日本サッカー協会が中心となって女子のサッカー普及に取り組んでいるように野球界全体で中長期的な視野に立って女子の普及に取り組むことが重要である。

第3節 今後の女子野球の普及についての示唆

東京六大学のリーグ戦で明治大学の小林と東京大学の竹本が対戦した当時、女子の硬式野球チームという新たな分野ができるのか、女子が男子に混じってプレーしていく形に進んでいくのか全くわからなかった³⁸⁾。その後、二人に続く選手が登場しないことから見ても、高校・大学と進んでいく中で身体的能力やパワーの差から男女が混じって一緒にプレーしていくのは困難であると同時に強さやスピードという価値から女性は二流であることが顕在化したと言える⁴⁰⁾。当時、明治大学の小林は「男子と女子のパワーの差はどうしようもない。女子野球というのが確立していくのであればその方がよい」³⁸⁾と述べている。

萩本欽一が率いる茨木ゴールデンゴールズに片岡安祐美が加入したのは、話題づくりという面が大きかった³⁶⁾。萩本が球団を作り、当時衰退していた社会人野球を盛り上げるにあたっては、話題作りと宣伝が必要だったのである。

独立リーグに入団した吉田えりは、高校時代に男子との体力差を感じるようになり、

男子と同じ土俵で戦うためにナックルボールを習得した。普通にプレーしていたのでは男子と対等には戦えないという認識から、特殊な変化球であるナックルボールを習得したのである。彼女の場合は、男子相手に戦うためにナックルボールを習得したことから男子が相手でなくては意味がないと言えるかもしれない。

小林や竹本の時代は、男子に混じってプレーする以外に野球を継続する方法がなかった。片岡と吉田は、特殊なケースと言える。

現在は、女子のプロ野球リーグが開催され、目指す頂点ができた。このことから今後は、男子の中に混じってプレーするのではなく、女子だけでプレーを行う「女子野球」の魅力を生み出し確立していくことが重要である。

江刺は、男女の高校生が野球と今後どのようにかわる可能性があるかを男性原理への一元化、女性原理への一元化、中性的なものへと変質、両性の特徴を強調という四つの道で示した。そして、高校野球は、男性の野球と女性の野球を明確に分けて、両性の特徴を強調する道が妥当と結論づけている⁴⁾。

現在の女子野球の規格とルールは、ほとんど男子の野球と同じである。一部の女子大学野球の大会でバッテリー間の距離、塁間等を女子用に短くしているケースもあるが、女子プロ野球などは、使用する球場も高校野球やプロ野球と同じ球場を使用している。バッテリー間の距離や塁間も同じである。女子のプロ野球で比較すると男子との違いは、イニング数が7回であることと金属バットを使用する程度でその他はほとんど同じである。

男子と同じ規格やルールでプレーをしても「女子野球」の魅力は、なかなか創出できない。基本的に忠実できびきびとしたプレーが女子野球の魅力であるが、一番の課題はパワー不足である。金属バットを使用しているものの本塁打は少なく、また、投手も130キロを投げるような投手はいない。ホームラン打者や130キロを投げる投手などパワーという点で飛び抜けた選手が必要である。女子プロ野球では、2013年度のシーズンからホームグラウンドのスタジアムにラッキーゾーンが設置されるがよい試みであると言える。選手個々のレベルアップも必要であるが、女子野球特有の規格やルールの検討も必要であろう。

野球をプレーしている男子にとって、ひとつの目標となっているのが甲子園出場である。小学校、中学校でプレーしている男子は、高校野球で甲子園に出場することを夢見ていることは疑いのない事実である。甲子園出場という夢があるから中学校、高校でも

野球を継続していくのである。女子の場合は、通称「女子高生の甲子園」呼ばれる大会はあるが、プロ野球等で使用する球場では行わない。男子の甲子園と同じく立派な球場で開催することで魅力を創出し、それが認知度の拡大に繋がると考える。

第4節 今後の課題

本研究は、歴史的背景から女子野球が定着してこなかった理由を明らかにして、現状の問題点と今後に向けた指針を示すことを目的とした。その中でサッカー界の取り組みを参考にしたが、同じベースボール型のスポーツであるソフトボールについても比較検討が必要であると考え。女子ソフトボールは、2008年の北京オリンピックで金メダルを獲得したのに象徴されるように女子のスポーツとして定着しており、認知度も高い。野球をプレーしていた多くの女子選手が中学以降にソフトボールへと転向していると考えられるが、その状況を把握すると共に、ソフトボール界での取り組みを検証することが必要であろう。

また、国際野球連盟は、野球が2012年のロンドンオリンピックから除外されたのを受けて、オリンピック競技への復帰を目指して、一時は、女子野球も追加対象として活動していく方針を明らかにした⁴⁸⁾。しかし、2020年夏季オリンピックでの実施競技復帰を目指す国際野球連盟と国際ソフトボール連盟は、2012年の10月に両競技を統括する国際連盟の創設に向けて覚書を交わした⁴⁹⁾。ロンドンオリンピックの実施競技から外れた両競技は、男子を野球、女子をソフトボールとした1競技でのオリンピック競技復帰を目指すことになった。

オリンピックの競技種目に追加されることで女子野球の普及が加速されることが期待されていたが、国際野球連盟自らが女子野球のオリンピックへの道を閉ざしてしまったと言える。

また、女子野球の普及には、競技人口の拡大が不可欠であるが、そもそも女子の競技人口がどれくらいで、野球をプレーする可能性のある女子がどれくらいいるのかを把握することも今後の課題である。

さらに、シーズンスポーツ制を取り入れたり、いろいろな種目の競技を行う機会を創出して、競技者の可能性を見出すなど、競技する種目について、選択の余地を与えるようなシステムを構築していくことが必要であると考え。現在の日本では、多くの競技者がひとつの種目の競技しか行えないシステムになっている。女子の競技人口に限りあ

るとしたら、このことが女子野球の普及を今後実践していく上での課題となっていくと考えられる。

引用文献

- 1) アサヒスポーツ(1926). キツンボールの盛況. 第4巻第6号, 28.
- 2) 江刺正吾(1984) 女性スポーツの現状と問題点. 佐伯聡夫, 現代スポーツの社会学. 東京, 不昧堂出版, 189-204.
- 3) 江刺正吾(1992). 女性スポーツの社会学. 東京, 不昧堂出版, 178-185.
- 4) 江刺正吾(1994) 甲子園とジェンダー. 小椋博, 高校野球の社会学, 京都, 世界思想社, 63-80.
- 5) 花谷建次, 入口 豊, 太田順康(1996). 女子「野球」に関する史的考察 (I) - アメリカ女子ベースボール史 -. 大阪教育大学紀要第IV部門. 第45巻第1号, 101-117
- 6) 花谷建次, 入口 豊, 太田順康(1997). 女子「野球」に関する史的考察 (II) - 日本女子野球史 -. 大阪教育大学紀要第IV部門. 第45巻第2号, 289-302.
- 7) 花谷建次, 入口 豊, 太田順康(1997). 女子「野球」に関する史的考察 (III) - 日米女子「野球」の比較と研究 -. 大阪教育大学紀要第IV部門. 第46巻第1号, 91-102
- 8) 畠田繁太郎(1924) 女子の野球に就いて. 木下武之助, 日本オリンピック年鑑, 大阪, 中央運動社, 48-52.
- 9) 廣瀬謙三(1919). 女学生野球大会. 野球界. 6月号, 43-44.
- 10) 井谷恵子(2004) 女性スポーツのムーブメントを問う. 飯田貴子, スポーツ・ジェンダー学への招待, 東京, 明石書店, 26.
- 11) 來田享子(2004) スポーツへの女性の参入. 飯田貴子・井谷恵子, スポーツ・ジェンダー学への招待, 東京, 明石書店, 47-48.
- 12) 木下秀明(1970). スポーツの近代日本史. 東京, 杏林書院,
- 13) 木下東作(1922). 女子體育の目標. 大日本体育学会編「体育と競技」. 第1巻第5号, 53-55.
- 14) 北田和美(2004) 高等女学校—日本女性スポーツの黎明期を支える. 飯田貴子・井谷恵子, スポーツ・ジェンダー学への招待, 東京, 明石書店, 61-64.
- 15) 越原和(1919). 女子に野球を奨励す. 野球界. 6月号, 12-14.
- 16) 桑原稲敏(1993). 女たちのプレーボール—幻の女子野球青春物語—. 第1刷. 東京, 風人社,
- 17) 京都市第一小学校(1903). 女子適用ベースボール法. 京都, 京都市第一小学校,
- 18) 大谷武一(1922) 女子體育の根本問題. 大日本体育学会編「体育と競技」. 第1巻第

9号, 5.

- 19) 大谷武一(1922) 簡易野球. 大日本体育学会編「体育と競技」. 第1巻第5号, 56-59.
- 20) 大阪毎日新聞 1923年7月16日
- 21) 大阪毎日新聞 1923年12月10日
- 22) R. ホワイティング(1992). 玉木正之訳. 和をもって日本となす. 東京, 講談社,
- 23) 坂上康博(1998). 権力装置としてのスポーツ. 東京, 講談社, 50-64.
- 24) 坂上康博(2001). にっぽん野球の系譜学. 第1版. 東京, 青弓社,
- 25) 白井規矩郎(1902). 欧米に現行する体操と遊戯(二). 教育時論. 610号, 19.
- 26) 庄司節子(2011) 近代日本における女性スポーツの創造—大正期の東海女学生キツンボール大会への視線—. 東海体育学会, 創造とスポーツ科学, 東京, 杏林書院, 57-71.
- 27) 庄司節子(1998). ルールからみた大正期の女子野球普及についての検討. 日本体育学会大会号. (49), 161.
- 28) 庄司節子(1997). 東海女子学生キツンボール大会と女子野球の普及活動. 日本体育学会大会号. (48), 142.
- 29) 田原淳子(2008) 女性スポーツアスリートとプロスポーツ. 川西正志・野川春夫, 生涯スポーツ実践論 生涯スポーツを学ぶ人たちに, 東京, 市村出版, 128-133.
- 30) 高瀬養(1924) 日本オリンピック大会と其所感. 木下武之助, 日本オリンピック年鑑, 大阪, 中央運動社, 15-18.
- 31) 竹内通夫(1999). わが国野球史の一側面—明治・大正期における女子野球について. 日本体育学会大会号. (50), 798-799.
- 32) 多木浩二(1995). スポーツを考える. 第4刷. 東京, ちくま新書,
- 33) 谷口雅子(2007). スポーツする身体とジェンダー. 第1刷. 東京, 青弓社,
- 34) 谷口雅子(2012) 女性スポーツの発展. 井上俊・菊幸一, よくわかるスポーツ文化論, 京都, ミネルヴァ書房, 54-55.
- 35) 谷岡雅樹(2007). 女子プロ野球青春譜 1950～戦後を駆け抜けた乙女たち～. 第1刷. 東京, 講談社,
- 36) 谷岡雅樹(2010). 甦る! 女子プロ野球—ヒールスパイクに履きかえて. 第1刷. 東京, 梧桐書店,
- 37) 寺田瑛(1923). 女子の運動競技. 東京, 日本評論社, 108-111.

- 38) 手束仁(2002). 東京六大学野球女子投手物語—ふたりの勇氣. 第1刷. 東京, アリアドネ企画,
- 39) 戸高真弓 (2010). 日本プロ野球リーグの挑戦～ガラスのスパイクを届けて～. 初版. 大阪, 日本女子プロ野球機構,
- 40) 東京スポーツ 1953年1月号
- 41) 東京スポーツ 1954年1月号
- 42) 東京スポーツ 1955年8月号
- 43) 常陰純一(1995). 私の青空—日本女子野球伝. 第1刷. 東京, 径書房, 41.
- 44) 大和球士(1977). 真説 日本野球史 明治編. 東京, ベースボールマガジン社, 1-20.
- 45) 大和球士 (1977). 真説 日本野球史 大正編. 東京, ベースボールマガジン社,
- 46) 吉田章信 (1923). 女子に望ましき運動法. 運動界. 3月号, 121-122.
- 47) がんばれ! 女子野球 <http://girls-bb.com/>
- 48) 情熱女子野球 <http://joshiyakyuu.jugem.jp/?eid=66>
- 49) 国際野球連盟 (IBAF) 日本語公式サイト <http://baseballjpn.com/ibaf>
- 50) なでしこジャパン <http://nadeshikojapan.jp/>
- 51) 日本中学体育連盟 <http://www18.ocn.ne.jp/~njpa/>
- 52) 日本女子プロ野球機構 <http://www.girls-probaseball.jp/>
- 53) 日本女子野球協会 <http://www.wbaj.or.jp/>
- 54) 日本サッカー協会 <http://www.jfa.or.jp/>
- 55) 全国高等学校女子硬式野球連盟 <http://www.girls-baseball.jp/>
- 56) 全日本大学女子野球選手権大会魚津市実行委員会
<http://www.spo-uozu.com/jyakyu/>
- 57) 全日本女子軟式野球連盟 <http://zenjoren.com/>

Research on the historic investigation and the present condition of women's baseball

Shingo Tachi

Abstract

1. Problem

The woman sport is attracting the interest in recent years so that it may be represented by activity of Nadeshiko Japan of women's football. The representative of Japan women's baseball team is obtaining good results called 3 consecutive championship from 2008 to 2012 at the IBAF World Cup of women's baseball. The women's professional baseball league has been also held since April, 2010. Nevertheless, baseball has been said to be the representation of a man's sport for a long time. In the Japanese high-school baseball league, the participation to a woman's regular-season game is not allowed.

Even if it compares with the number of teams of women's football or women's softball, there are few teams of women's baseball, and it is clear that the environment where a woman plays baseball under the present circumstances is not ready.

I am a volunteer coach for girls' baseball team now. I realize that there is a situation which cannot be easily played even if they would like to play baseball. I would like to improve this present condition. It is a motive of this research.

2. Research task

In this research, by considering the history of women's baseball in Japan, while making clear from an historical background the reason to which women's baseball was not fixed, the present problem is clarified, and the indicator for women's baseball is suggested.

3. Method of research

About the history of women's baseball, it verifies from historical records, such as literature and newspaper. Also, information, including a newspaper, the Internet, etc., is collected about the present condition of women's baseball.

4. Conclusion

The women's baseball which acquired popularity temporarily at Meiji and Taisho Era was judged that the ideological background and the woman "a good wife and wise mother" are unsuitable from the mental thought "she is feminine" to a woman, and the end was greeted.

The woman professional baseball organized soon after the war shifted to a non-professional organization immediately because its organization was vulnerable and player's experience was little and player's technology was unripe. And National amusement was also diversified in connection with high economic growth, the advertisement medium also progressed, and it disappeared again from the effect of women's baseball as advertisement having faded.

Now, a woman comes to participate in various sports combative etc., and an ideological background is also fading. Also in women's baseball, a high school, a university, and a team are formed and women's professional baseball came to exist as the peak. It can be said that it differs from the historical background that women's baseball disappeared in the past. In such a situation, women's football overcomes an unfortunate time and can say that it is important to follow example of various measures which came to acquire popularity.